

# 比嘉春潮と沖縄研究の展開

——インフォーマントとしての役割——

並 松 信 久

## 要 旨

比嘉春潮（1883-1977、以下は比嘉）は明治期から昭和期にわたって活動した、沖縄史に関する研究者である。研究者としてのみでなく、社会主義運動家としても、エスペラント語の普及者としても知られている。比嘉は沖縄師範学校卒業後、小学校教諭となり校長にもなる。そして小学校校長を辞したのち、新聞記者、さらに沖縄県吏となっている。1910（明治43）年の伊波普猷（1876-1947、以下は伊波）との出会いによって、沖縄史に関心をもつ。1923（大正12）年に上京して出版社の編集者となり、柳田国男（1875-1962、以下は柳田）のもとで民俗学に関心をもつ。その一方で社会主義運動との関係をもち続ける。

上京後、民俗学を通じて沖縄研究を深めていく。しかし比嘉の場合、民俗学の視点からの沖縄研究だけではなく、社会主義運動との関連から、社会経済史の視点からの研究も多くみられる。その業績は戦後に数多く出される。この沖縄研究にあたって比嘉は自らを「インフォーマント」（informant）と語る。しかしながら『比嘉春潮全集』全5巻（沖縄タイムス社、1971-1973年）というほう大な研究業績から、比嘉が単なるインフォーマントであったとは考えにくい。これまで比嘉に関する研究成果が出されているものの、多くの先行研究では、伊波や柳田からの「影響」とされることによって、比嘉のインフォーマントとしての役割と、研究者としての活動とが、つながりのないものになっている。

本稿ではこの比嘉の活動期を大まかに、(1) 脱沖縄の意識と沖縄回帰の二重の矛盾のなかでキリスト教からトルストイズムに傾倒していった時期、(2) 1910（明治43）年の伊波との出会いをきっかけとする沖縄史への関心を深めた時期、(3) 社会主義運動の先駆者となった時期、(4) 柳田との交流をきっかけに民俗学研究に取り組んだ時期、(5) 戦後になって数多くの著作を発表した時期などに分けた。そしてこれらの活動期にしたがって、比嘉というインフォーマントの存在が、沖縄研究にとって重要な役割を果たしたことを明らかにした。比嘉は沖縄固有の文化や方言などの情報や資料を「客観的」に提供することで、沖縄の歴史を伝える研究者となった。比嘉はインフォーマントとして沖縄の「個性」を表現した研究者であるといえる。

キーワード：比嘉春潮、沖縄研究、インフォーマント、伊波普猷、柳田国男

## 目 次

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1 はじめに         | 2 沖縄史への関心     |
| 3 社会主義思想への傾斜   | 4 インフォーマントの意識 |
| 5 民俗学との出会い     | 6 インフォーマントと研究 |
| 7 沖縄民俗研究への取り組み | 8 戦時下の沖縄研究    |
| 9 社会経済史的な視点    | 10 結びにかえて     |

## 1 はじめに

比嘉春潮（1883-1977、以下は比嘉）は明治期から昭和期にわたって活動した、沖縄史に関する研究者である。研究者としてのみでなく、社会主義運動家としても、エスペラント語の普及者としても知られている<sup>1)</sup>。比嘉は1883（明治16）年に中頭郡西原間切翁長（現・西原町）で生まれ、沖縄師範学校を卒業後、小学校教諭となり校長にもなる。1910（明治43）年に伊波普猷（1876-1947、以下は伊波）と知り合って、伊波が唱える「沖縄学」に関心を抱くようになる<sup>2)</sup>。沖縄学ばかりでなく、後に河上肇（1879-1946）から影響を受けて、社会主義にも関心を抱くようになる。1917（大正6）年に小学校校長を辞したのち、新聞記者になり、さらに沖縄県吏となる。1923（大正12）年に上京して編集者となり、柳田国男（1875-1962、以下は柳田）のもとで民俗学に関心をもちようになる。一連の転職や上京は、社会主義運動が関係していた。

上京後、民俗学を通じて沖縄研究を深めていった。しかし比嘉の場合、民俗学の視点からの沖縄研究だけでなく、社会主義運動との関連から、ないし社会経済史的視点からの研究も多くみられる。比嘉の研究の根幹部分は、ほぼ戦前期に形成されているものの、その業績は戦後に多く出されているので、時代状況を反映して社会経済史的な側面が強く出ている。戦後は沖縄人連盟の発起人のひとりとなるとともに、他の在京の沖縄出身知識人とともに沖縄文化協会を結成して、沖縄研究の推進につとめている。

この沖縄研究を推進するにあたって、比嘉は自らの役割を「インフォーマント」(informant)と語っている<sup>3)</sup>。インフォーマントとは一般的に情報あるいは資料の提供者とされる。確かに比嘉は数多くの論考や著作を発表しているものの、それは「事実」を淡々と書いたものであり、主張や思想に乏しい面もある。比嘉はもっぱら伊波や柳田による研究に対するインフォーマントにすぎなかったのであろうか。比嘉の業績は『比嘉春潮全集』全5巻（沖縄タイムス社、1971-1973年）にまとめられている。この業績の分量もさることながら、その内容をみれば、比嘉が単なるインフォーマントであったとは考えにくい。しかも比嘉の業績のほとんどは、前述のように戦後になって出されたものである。比嘉は、戦後はすでに60歳を越え、沖縄を取り巻く時代状況がめまぐるしく変わるなかで、沖縄研究を推進する立場にあり、インフォーマントであり続けたとは考え難い。

ところで、これまで比嘉に関する研究は数多くはないものの、その成果が出されている。たとえば発表順に列举すると、比屋根照夫「沖縄研究における歴史認識—「比嘉春潮全集」にふれて」（『文学』、第40巻4号、1972年、172～80ページ）、三木健「研究者訪問 沖縄の歴史と比嘉春潮翁」（『南島史学』、第4号、1974年、55～61ページ）、由井晶子「比嘉春潮を語る—同伴者の衿持を貫いた気骨」（『新沖縄文学』、第33号、1976年、45～50ページ）、由井晶子「比嘉春潮を語る（続）—同伴者の衿持を貫いた気骨」（『新沖縄文学』、第34号、1977年、115～

21 ページ)、鹿野政直「民間学の二人の先達」(鹿野政直『歴史のなかの個性たち』、有斐閣、1989年、85～109 ページ)、比嘉政夫「比嘉春潮—その研究と方法」(瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス [増補版] 日本民俗学の成立と展開』、ペリかん社、1994年、155～69 ページ)、仲嶺政光「方言講演」考—近代沖縄・伊波普猷と比嘉春潮と地域文化」(『教育学年報』、第6号、1997年、521～45 ページ)、比屋根照夫「近現代沖縄における比嘉春潮の思想的軌跡」(『ふるさとを愛した篤学・反骨の研究者比嘉春潮顕彰事業報告集』、比嘉春潮顕彰碑建立期成会、2006年)、納富香織「比嘉春潮論への覚書—1930～1940年代の在本土沖縄県人との関係を中心に(付 比嘉春潮著作目録)」(『史料編集室紀要』、第32号、2007年、21～50 ページ)などである。

主に比嘉の思想遍歴や歴史認識を明らかにしたものである。他には数多くの研究会の設立と比嘉との関係、あるいは沖縄方言をめぐる研究である。しかしながらこれらの研究成果は、いずれも比嘉におけるインフォーマントとしての役割と、研究者としての活動あるいは貢献が切り離されて考えられている。つまり多くの先行研究では、伊波や柳田からの「影響」と一括されることによって、比嘉のインフォーマントとしての役割と、研究者としての活動とが、つながりのないものようになってしまっている。比嘉の青少年期の経験が、沖縄問題に取り組むきっかけであるとするれば、その後、伊波や柳田に対するインフォーマントとして活躍した時期があったとはいえ、晩年(戦後)に青少年期の問題意識に応える形で、自身の研究成果を発表している。比嘉の研究業績をみれば、情報や資料を提供するインフォーマントとして活躍した時期は、研究業績をあまり発表していなかったものの、研究の蓄積時期にあたる。戦後、この研究業績が発表されるので、インフォーマントと研究者とは連続性があり、切り離すことができない。

さらに、これまでの沖縄研究(あるいは沖縄学)をみた場合に、比嘉というインフォーマントの存在がいなければ、明治期から今日までの展開は困難であった。比嘉は沖縄固有の文化や方言などの情報や資料を「客観的」に提供することで、沖縄の歴史を伝える研究者となる。比嘉は徹底してインフォーマントの役割を果たすことを通じて、沖縄の「個性」を表現した研究者であるといえる。そしてインフォーマントの役割を徹底して果たすことができたのは、多くの人との「つながり」であった。比嘉は多くの研究会や各種の組織団体に参加しているが、そのことを通じて多くの人とのつながりを持ち、それによってインフォーマントの比嘉が支えられた。比嘉は人とのつながりを通じて、終生、在野で沖縄研究に没頭した人物であった。

この比嘉の活動期を大まかに分けると、キリスト教からトルストイズムに傾倒していった時期、1910(明治43)年の伊波との出会いをきっかけとする沖縄史への関心を深めた時期、社会主義運動の先駆者となった時期、上京後に柳田との交流がきっかけとなり民俗学研究に取り組んだ時期、雑誌『改造』や『島』などの編集に携わった時期、戦後の沖縄人連盟や沖縄文化協会で活動した時期などに分けられる。本稿では、比嘉のこれらの活動期にしたがって、比嘉

がインフォーマントとしての役割を果たすことによって、沖縄研究にどのように寄与したのかを明らかにしていきたい。

本論に入る前に、沖縄研究と沖縄学との違いを確認しておく。比嘉の全集のなかでは、「沖縄学」という用語が数多くみられる。したがって比嘉は沖縄学の形成に関わったといえなくもない。しかしながら沖縄学という用語は、1948(昭和23)年に沖縄研究の金城朝永(1902-1955, 以下は金城)による発言から始まるといわれている<sup>4)</sup>。比嘉の研究業績の多くは戦後に出されているので、比嘉による使用は金城の発言以降ということになる。しかし金城の沖縄学の概念には、抵抗や反対、そして自己主張の言葉としての意識はない。この点で金城の沖縄学と、比嘉の使用する沖縄学は同一視することはできない。もっとも比嘉も、沖縄を対象とする学問はすべて沖縄学に入るというように、厳密な定義に基づいて使用しているのではなく、かなり漠然とした枠組みとして使用しているにすぎない。比嘉の研究の根幹部分は、沖縄学が使われた戦後ではなく、ほぼ戦前に形成されているので、本稿では沖縄学という用語は避けて、沖縄研究という用語を使用している。

なお本稿の引用文には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実を重視する立場から、あえて訂正を加えていない。さらに引用文中の句読点については、読みやすくするために一部、筆者が付け加えた部分がある。

## 2 沖縄史への関心

比嘉の生まれた1883(明治16)年は、琉球が沖縄県となって4年後にあたる。明治政府の同化政策によって、比嘉はいわゆる本土並みの教育を受ける。比嘉は西原生まれであるとはいえ、「首里士族」出身の家に育った。この家には、西原の平民とはちがう身分であるという誇りが色濃く残っていたという。比嘉は「当時、首里人で地方に住む「居住人」にとって、最大の理想は「立身出世」して、また首里へもどることであった。われわれには、首里にも親戚があり、そこの子供たちにとって、われわれは、いうなればカントリー・カズンズ(田舎の従兄弟)であるから、やや見下げの風がほの見え、こちらもまたコンプレックスを持っていたので、なおいっそう首里風俗を見習うことを心がけた。逆にまた「なにをッ」といった反発の気分もあった。一方にはまたわれわれより一段低いとされている地元人がいる。私が長じて人間の平等、身分制への反発を感ずるようになった一因がこのへんにもあったと思われる」<sup>5)</sup>と当時の状況を語っている。

さらにこの状況を如実に示しているのが、当時の沖縄教育界であった。当時の沖縄における学校の校長は、「大和人」(当時は内地人とよばれた)が通例とされていた。比嘉が「教員になったころには、一応、小学校の校長には沖縄地元出身者が進出してはいた。しかし実権は外来者つまり大和人の手ににぎられていた」<sup>6)</sup>という状況にある。したがって日本の「同化」教育の

浸透があったことはいまでもないが、教師のなかでも差別があった。つまり大和人は、首里の旧士族層出身者に対しては、たとえ訓導や教生であったとしても、言葉遣いが違っていたといわれる。まして離島出身の教生に対しては軽蔑的な態度で接した。この教師の世界でも現れているように、「大和人は沖縄人を、沖縄人は先島など周辺の島の人を、先島などではまた中心になる島の人びとが小さな離島の人びとを、それからそれへとさげすむのでは、まるで箱の中から小さな箱が次々として出てくるようにキリのない話ではある」<sup>7)</sup>という状態にあった。日本と沖縄、沖縄と周辺の島、先島などの島々において差別意識や、そこに残存する身分制が、幾重にも重なって存在していた<sup>8)</sup>。

したがって比嘉少年の眼にうつる沖縄社会は、二重の矛盾に満ちていた。ひとつは沖縄社会に残る身分制であり、それに起因する差別意識である<sup>9)</sup>。比嘉は少年期から差別と貧困が巢食う農村社会の実態を直視している。比嘉少年にとって地元の農村社会は「見下げる」対象でもあり、旧士族層に対する「反発」の根源でもあった。もうひとつは沖縄自体が差別を内蔵する社会であったのと同時に、日本本土からも差別される存在であったことである。このいわば二重の差別とそれに基づく矛盾に、少年期の比嘉は直面していた。

しかし比嘉にとって日本と沖縄の関係は、差別というイメージのみではなく、二つのイメージが交錯している。ひとつは比嘉にとって日本が「開化」を象徴する存在であり、その存在が沖縄社会に根強く残る差別や貧困を解消する希望を与えたことである。これは比嘉にとって大きな魅力であり、ここから脱沖縄の志向が強くなった。もうひとつは日本は「抑圧」を象徴する存在であり、それが反発ないし悲憤の対象となったことである。ここからは沖縄回帰の心情が強くなる。比嘉はこの相反する方向性をもつ心情の緊張関係のなかに身をおくことになった<sup>10)</sup>。

このような緊張関係におかれた比嘉が、まず心の拠り所にしたのがキリスト教であった。キリスト教への傾斜は、この緊張関係のなかにおける行動であった。このときの状況を後に回想して、「わたくしは、はじめは苦しいからキリスト教に入ったんです。自分ら沖縄人は、なんという人間だろう。なんでこんな悪い運命のなかにあるのだろう、ということから、神にすがらようになったんです」と語っている。キリスト教の洗礼を受けたのは、比嘉と親戚関係にあった社会運動家の屋部憲伝やべけんてん(1888-1939、以下は屋部)の影響であった<sup>11)</sup>。屋部とともに首里のメソジスト教会のシュワルツ(Henry B. Schwartz, 1861-1945)という宣教師のもとに通っていた<sup>12)</sup>。そこで比嘉は初めて聖書を読んだようである。その後、屋部はキリスト教の人道主義を貫くために徴兵忌避をして、ハワイへ移住する。屋部がハワイへ去った後、比嘉は数名の友人といっしょに、英語の学習も兼ねて、シュワルツの娘から聖書の講義を受けている。それと同時に比嘉はシュワルツの布教の手伝いもするようになった。

しかしながら、シュワルツから布教活動に積極的に関わるようにという働きかけに対して、比嘉は「なんだか自分でも十分だとは思っていない信仰心を買いかぶられるのに、かえって不

信の気持ちを抱き、水をさされた思いでぶつり教会へ行くのをやめてしまった」<sup>13)</sup>と語っている。比嘉はキリスト教の布教活動に熱心に取り組んだとしても、自分の抱えている問題意識に応えるものではないと感じたようである<sup>14)</sup>。キリスト教の布教活動が、現実の沖縄問題を解消する糸口にはならないと感じて、比嘉はキリスト教から遠ざかっていく。

しかしキリスト教からまったく離れたわけではない。比嘉は「その後わたくしの友人から徳富蘆花の『巡礼紀行』を借りて読んだのが、きっかけで、トルストイを知るようになった。トルストイの考えを知って、なんでこのような立派な人がいるのかと思ったんです。ロシアの国で皇帝にも反抗できるのはトルストイひとりであったということを知って、こんな人が沖縄にもおれば、沖縄人もいいのに、と思ったのです。だから、わたくしのキリスト教は、なんで沖縄人をこんな運命におとし入れるのかということから、これを宗教によってなくするということがあったわけです。それからトルストイの宗教にいて、さらにトルストイの文学にいき、そしてだんだん広くなった」と語っている<sup>15)</sup>。

比嘉はトルストイ (Lev Nikolaevich Tolstoi, 1828-1910) に傾斜し、トルストイズムに入り込んでいく<sup>16)</sup>。比嘉がトルストイズムに求めたものは、キリスト教と同様、沖縄人をどのように救済するかという発想に裏打ちされていた。しかしキリスト教とは異なり、トルストイが比嘉に最も影響を与えたのは、その教会否定であった<sup>17)</sup>。教会否定こそが、既存の国家体制や社会制度への疑問につながるものであったからである。この影響から当時の比嘉は、「若い私は「腹黒き内地人よ、意気地なき沖縄人よ」と、憤り嘆いたが、実は、当時の大和人の目にあまる横暴は、彼らが極悪非道だったからでもなく、また沖縄人の無気力だけに帰すべきものでもなかった。最大の原因は制度であった」<sup>18)</sup>と自伝のなかで語っている。国家体制はともかくとして、沖縄の社会制度こそ、沖縄人が自らの手で変えていかなければならないと考えるようになる。

原因は制度であると考える比嘉は、キリスト教やトルストイズムから、徐々に社会主義思想に関心をもつようになる。比嘉がキリスト教を知る直接的なきっかけは、前述のシュワルツを通じてであったので、その時から培われた英語力が、社会主義思想を知る上で役に立った。比嘉は『共産党宣言』をはじめとする社会主義に関する著作を、邦文よりも英文で読むことができた。邦文のほうは規制や発禁処分の対象となりやすいので、比嘉にとってむしろ英文のほうの方が好都合であった<sup>19)</sup>。後に比嘉は1919(大正8)年にアメリカから英語・エスペラント語対訳『共産党宣言』を取り寄せて読んでいた。英語とエスペラント語は社会主義関係の著書を手に入れて読む際の隠れ蓑となった。

比嘉はこのような思想的な遍歴をたどるが、もちろん「沖縄」は常に思想の原点であり続けた。比嘉はキリスト教・トルストイズム・社会主義思想などの「外来」思想に触れるが、それは沖縄の救済ないし改革をめざしたものであった。しかし外来思想では沖縄問題自体に迫ることはできなかった。沖縄とは何か。これに読み解くにはその歴史を解き明かす必要がある。比

嘉は1910（明治43）年に伊波との出会いをきっかけにして、沖縄の歴史への関心を深める。もっとも同年に日韓併合があり、その時に書かれた日記に、比嘉を沖縄の歴史へと導く精神的な葛藤がみられる。

比嘉は日記において、

去月二十九日、日韓併合。万感交々至り筆にする能はず。知りたきは吾が琉球史の真相也。人は曰く、琉球は長男、台湾は次男、朝鮮は三男と。嗚呼、他府県人より琉球人と輕侮せらるる、又故なきに非らざる也。嗚呼、琉球人が琉球人なればとて輕侮せらるるの理なし。されど理なければとて他人の感情は理屈にて左右し得るものに非らず。矢張り吾等は何処までも「リキ人」なり。嗚呼、琉球人か。されども吾等の所謂先輩は何故に他府県に在りて己れの琉球人たることを知らるるをかくも恐るるか。誰か起ちて「吾は琉球人なり」と呼号する者なきか。かかる人あらば吾は走り行きて其靴の紐を解くべし。吾は意気地なき吾等の祖先を悲しみ、意気地なき吾等の先輩を呪ひ、意気地なき吾が身自身を恥づるものなり<sup>20)</sup>。

と記している。「己れの琉球人たることを知らるるを恐るる」という脱沖縄の志向と、「吾は琉球人なり」という沖縄回帰の志向の交錯であり葛藤であった。比嘉が沖縄の歴史に関心を抱くことによって、前述の心情の緊張関係がさらに強烈なものとなる。

しかしこの時の葛藤をきっかけにして、直線的に（自助努力で）沖縄史の解明へと向かったわけではない。比嘉はこの経緯について、「このころの私は、沖縄についてまるで知らなかった。また世界観すら、わが思想に大なる変化ありと書いてはいても、まだ十分に確固たるものとはなっていなかった。いっぽうでは朝鮮、台湾の併合を理不尽なと思いながら、他方また、沖縄をそれらと並べて異民族視することに腹を立て、しかもそこに横たわるちがいを解明することはできなかった。伊波普猷氏と近づきになったのはちょうどそのころである」<sup>21)</sup>と語っている。葛藤が沖縄史への関心に結びついたことは確かであるものの、それは偶然ともいえる伊波との出会いによって導かれたものであった。

比嘉の沖縄史への関心は、強烈な葛藤を経て、伊波との出会いによって強くなっていく。伊波との出会いは、単に歴史への関心があったからというわけではない。比嘉と伊波は、お互いに葛藤をめぐって、通じ合うものがあった。すなわち脱沖縄の志向は「同化」への志向であり、沖縄回帰の志向は、沖縄の主体形成をめざす「個性」への志向である。この同化と個性は伊波の沖縄研究にも通ずる点であった<sup>22)</sup>。つまり比嘉の心情の緊張関係と、伊波の沖縄研究の主要課題とは類似であったために、歴史への関心を共有化したともいえる。

後に比嘉は自身の歴史認識について、

十七世紀初頭から今日まで、三百六十年間の沖縄の歴史は、忍従と屈辱の歴史である。このことを忘れて、現在の沖縄問題を考えることはできない。そう考えるのは、沖縄人のひがみではないか、といわれるかもしれない。たしかに、いまの沖縄の若い世代の人たちは、私と感じ方が違うだろう。私は沖縄に生まれ、四十三歳のとき本土に来て、それ以来四十年近くになるが、いままで沖縄人としての意識から離れたことはなかった。周囲の状況は、私に沖縄人であることを忘れさせてくれなかったのである。私は、沖縄人の心の奥底には、この歴史の重みが深く澱んでいると思う<sup>23)</sup>。

と回顧している。比嘉は沖縄回帰を強く意識しているが、それは自己発見ないし確認の過程であり、沖縄史を解明することは、この過程に他ならない。沖縄の歴史こそが、その個性を形作るものであるので、歴史をみるのが個性を解明することにつながると考えている。

もっとも比嘉の歴史認識の視座は、比嘉自身が独自に形成したものではない。それは伊波の影響によって形成され、伊波の思想によって根源的な形で表出する<sup>24)</sup>。伊波を語る比嘉の口調は敬意にみち、比嘉にとって伊波は「指針」となっている。比嘉が伊波の主張のなかで最も評価するのは、「(1) 沖縄人は元来異民族でなく日本民族であること、(2) 島津の琉球入り以来、その政策のために異民族視され、沖縄人は苦難を受ける運命におかれた、(3) 国家統一の下におかれた今日、沖縄人への異民族視・植民地的政治は廃さるべきである」<sup>25)</sup>という点であった。比嘉は伊波の業績を繰り返し強調しているが、とくに評価していたのは、(1) の日琉同祖論の主張よりも、(2) と (3) の異民族視されている点と、島津の琉球入り以来、植民地的政治による苦難の歴史を歩んでいるという点であった。つまり比嘉は伊波の同化という点よりも、個性という点を評価していたといえる。

伊波は沖縄的「個性」について、「天は沖縄人ならざる他の人によつては決して自己を発現せざる所を、沖縄人によつて発現するのであります。即沖縄人微りせば到底発現し得べからざりし所を、沖縄人によつて発現するのであります。個性とは斯くの如きものであります。沖縄人が日本帝国に占むる位置も、之によつて定まることと存じます」<sup>26)</sup>と語る。伊波によれば、沖縄的個性とは沖縄人でなければ発現できないものであり、それゆえに沖縄が日本において一定の位置を占めるという。したがって沖縄的個性を破壊してしまうことは、日本と沖縄の「両民族の間に於ける精神的連鎖を断切る」<sup>27)</sup>ものであるとされている。

比嘉はこの伊波の考え方に大きな影響を受ける。比嘉は1911(明治44)年4月29日の日誌において、伊波が著書『古琉球』(1911年12月刊)の直前に刊行した『琉球人種論』(1911年3月刊)に関する感想を記している。比嘉は、

先生の考では、今の琉球人は早く日本人と同化するのが幸福を得るの道である、其為めに右の様な論をする。向象賢や蔡温、宜湾朝保と言ふ人々も、決して日本びいきの人で

ない、寧ろ支那崇拜の思想を持って居た。併し、万人の幸福の為に同種族論を唱へて居た。伊波先生は勿論支那崇拜ではないが、琉球人を文明人として耻ぢざる人種、否或る特種な文明を造り得た、又造り得る人種として、種族的自尊心を持つて居られる。ここが吾々の先生に服する所である<sup>28)</sup>。

と記している。比嘉のいう「種族的自尊心」こそ、伊波のいう沖縄的個性の基礎をなすものであった。種族的自尊心によって志向される同化は、脱沖縄的な同化とは明らかに異なっている。種族的自尊心によって志向される同化とは、沖縄的個性に裏打ちされたものであり、沖縄人の手によって推進されるべきものであるという。そして沖縄史の解明は、この沖縄的個性を明らかにすることに他ならないというのである。

### 3 社会主義思想への傾斜

比嘉は伊波との出会いによって、沖縄史への関心を高める。しかしそれによって当時の沖縄の救済ないし改革しようとする意識が弱まったわけではない。比嘉は沖縄の現実を改めるには、前述のように制度を沖縄人の力で変えていかなければならないと考える。制度への目覚めは、社会主義思想へとつながる。比嘉は「わたくしの社会主義は、はじめは進化論ですよ。丘浅治郎博士の『進化論講話』などを読んでいたんです。ですからわたくしの社会主義は、進化論からきたものです。つまり、国家も人間もどう変化していくか、そして最後は社会主義国になる、人間も社会も、社会主義的になっていく」<sup>29)</sup>と語る。あるべき姿を社会主義的なものに求め、しかもそれは進化過程の結果であるという。しかし、これはあくまでも想定にすぎず、比嘉のなかで現実の沖縄の姿と、想定されたあるべき姿とは結びついていなかった。

比嘉は1915（大正4）年に郡役所から玉城小学校の校長に転じている。校長は週に一回の修身時間を担当するという慣例にしたがい、比嘉は授業を行なっている。しかし修身の授業というよりも、「授業は早々に切り上げて、ダーウィンの進化論をやさしくして聞かせたりした」<sup>30)</sup>ようである。比嘉はその精力の多くを教育以外のところに向けていたようであり、しかも進化論が日本に入ってきて盛んに議論された時期にあたり、時代の新思潮に対して敏感であったようである<sup>31)</sup>。その後、比嘉は政治活動（とくに社会主義運動）を封じようとする県庁の方針による人事異動で、1917（大正6）年に玉城小学校から那覇の松山小学校の校長へと移る。しかしすぐにこの小学校を退職し、沖縄毎日新聞社に入社して、記者となっている（さらに半年ほどで沖縄朝日新聞社へと移っている）。

比嘉は1919（大正8）年に沖縄県庁の役人となっているが、この頃には社会主義運動家の堺利彦（1870-1933、以下は堺）らと連絡を取り合うようになり、社会主義思想の普及につとめている。普及といっても、直接的に政治的な活動をするというわけではない。比嘉は当時の状

況について、「私には現実の政治の俗臭ふんぷんたる動きには、どうも真からの関心は持ちきれなかった。文学から社会思想に近づき、もっぱら読書を通じて世界を理解するといういき方で来たから、この時代にもやはり純粋に文人としてのやり方が性に合っていたのだろう。活動の場も、若い人びとを集めた研究会や講演会が中心になった」<sup>32)</sup> ようである。比嘉にとって社会主義思想は、もっぱら書物を通して学んだものであった。

書物を通じて思想を学んだという点については、実際には伊波による影響もあった。比嘉が語っているように、「伊波さんは、青年たちに極力読書をすすめた。思想の変革期であったから、とにかく新しい本を読み、そして新しい思想に接しろ、新しい思想ほどいいといった主義で指導した。それは明治三十九年、沖縄最初の文学士として、多大の期待を寄せられて帰郷したときから先生の一貫した態度だった。そしてその影響下から、いろいろな思想を持つ若い人びとが巣立ったのである。社会主義者のグループにしても、一部を除くほとんどが伊波さんの門下出身とってよかった」<sup>33)</sup> ということである。

当時、沖縄における何らかの思想的ないし文化的な活動は、伊波が館長をしていた県立図書館が中心となっている場合がほとんどであった。しかしこれは比嘉の社会主義思想と同様、読書を通して知識を得ることにとどまっていた。したがって、沖縄が抱えている問題の分析には役立ったかもしれないが、救済や改革へと直接的につながるものではなかった。比嘉の場合も例外ではなく、未だ沖縄問題と社会主義思想とは結び付いていなかったといえる。比嘉自身もこれを自覚していたようであり、「この頃まではまだ社会主義理論を、沖縄の現状に照らして分析、応用を試みるまでにはいたっておらず、もっぱら思想受け入れの段階だったということだ。極端にいえば、社会主義革命の理論を勉強し、たがいに気分を味わうことに熱心だった時代ともいえる」<sup>34)</sup> と語っている。

沖縄において何らかの社会主義思想の実践運動が起こったのは、比嘉が沖縄を離れた後のことであった。比嘉は1923（大正12）年1月に沖縄県庁を辞職して、上京を決意する。40歳の時であった。比嘉の自伝によれば、自分の社会主義的な思想や行動から、このまま沖縄にいても出世するとも思えないので、沖縄に二度と戻らないという決意のもとで上京したという。社会主義思想や運動に対する取締りが厳しさを増していた。しかし「私は上京したら小学教員になって運動をするつもりだった」<sup>35)</sup> と語っているように、上京後も社会主義運動に携わるつもりであった。

比嘉は上京して社会主義運動の同志である仲宗根源和（1895-1978、以下は仲宗根）や饒平名智太郎（1891-1960、後に永丘に改姓、以下は永丘）らの紹介で、とりあえず改造社に入社する。永丘が改造社の山本実彦（1885-1952、以下は山本）社長と親しかったことと、さらに仲宗根が堺の推薦状をもらったことによって、入社が決まった。もっとも山本社長は過去に沖縄で小学校教員をしていた（比嘉によれば、当初は土地整理事業の臨時雇の事務員であった）ので、沖縄人とは面識があった。

しかし比嘉によれば、改造社は社会主義に対して好意的であり、社長は沖縄に理解があると思ったことは、大きな間違いであったという。雑誌『改造』は「社会主義論文を載せ、進歩的な学者や評論家に書かせるので、編集者や社長もすべて革新派だと感ちがいでいたが、実際は山本社長は大の社会主義ざらい、要するに世の風潮が社会主義思想研究に傾いているので、商企業として取り上げている」<sup>36)</sup> だけであった。比嘉は改造社においても、表面的な社会主義を目のあたりにすることになる<sup>37)</sup>。

比嘉が上京した当時の日本は、第一次世界大戦後の戦後不況に続いて、1923（大正12）年9月の関東大震災による震災不況に見舞われ、全国的に深刻な経済危機の状況にあった。沖縄の経済状況も逼迫していた。沖縄経済は甘蔗栽培によって支えられていたなかであって、1920（大正9）年に砂糖相場が暴落し大不況に陥る。この時期は「ソテツ地獄」<sup>38)</sup> とよばれ、沖縄の三つの銀行が倒産（1925年）に追い込まれ、産業経済は破綻状態になる。この結果、移民と出稼ぎ者が急増し、県外に労働力が流出した。

沖縄の窮状を打開するために、沖縄救済に関する様々な議論が巻き起こる。すでに比嘉の上京前の1921（大正10）年10月に「沖縄協会」という組織が発足していた。この沖縄協会は「沖縄県の発展振興のため、沖縄を広く内外に紹介し、中央との連携を深める」<sup>39)</sup> ことを目的に設立されたが、比嘉もそのメンバーになっていた。具体的には当真嗣合（1884-1946、沖縄朝日新聞社社長）、和田潤（1872-1947、沖縄県知事）、高嶺朝教（1869-1939、沖縄銀行頭取）らが発起人となり、内務大臣の床次竹次郎（1867-1935）が総裁となって、金融救済の陳情、航路問題などを解決するための機関として発足している。このメンバーには沖縄側から知事をはじめ県庁関係者、経済界、新聞界などの主要な人物が名を連ね、伊波らも入っていた。在京の沖縄出身者も加わり、尚家当主の尚昌（1888-1923）をはじめ海軍軍人の漢那憲和（1871-1950）、大蔵官僚の神山政良（1882-1978）、そして永丘らもメンバーであった。

1924（大正13）年には官民協力のもとに「経済振興会」が結成され、県議会や国会への請願運動が行なわれる。1925（大正14）年2月には「沖縄県財政経済の救済助長に関する建議案」、翌1926（昭和元）年には「沖縄経済振興に関する請願書」が国へ提出されている。さらに当時の沖縄県知事であった井野次郎（1877-1952）が1931（昭和6）年6月に「沖縄県振興計画一五カ年計画」案を策定する。その計画をもとに那覇市の照屋宏（1875-1939）市長をトップとする「沖縄県振興促進期成会」が発足して、政府に実行を働きかけている。そして沖縄県振興計画が1932（昭和7）年に閣議決定され、翌1933（昭和8）年度から予算化される。しかし戦時体制下にあったために、1944（昭和19）年までの12年間で、その実施率は約20パーセントと低いものであった<sup>40)</sup>。

沖縄の救済に関しては、その課題に対して在京の沖縄出身者も、同じように向き合うことになる。沖縄救済請願運動のほかにも、学生会の創設や郷友雑誌の創刊など、様々な活動が行なわれる。上京した比嘉は、これらの活動に対しても積極的な支援を行なったことはいまでも

ない。比嘉は社会主義運動とも関係を保ちながら活動を行なっている。しかしこれは実践的な社会主義運動ではない。比嘉は自らの活動について、「私は、沖縄にいる時は啓発運動とでも名づけるような運動をやったけれど、東京に出てからは、体を張る実際運動はとでもできなかった。性格的にも向いていなかったし、情熱を燃え立たせて、向き不向きも考えず突っ走るほど若くもなかった」<sup>41)</sup>と語っている。上京してからも啓発運動の域を出るものではなかった。

もっとも比嘉が上京した1923(大正12)年という年は、社会主義者にとっては多難な年であった。早稲田大学の軍研事件、共産党第一次検挙、右翼による社会主義者高尾平兵衛(1896-1923)殺害事件、関東大震災後の亀戸事件、大杉栄(1885-1923)殺害事件、朝鮮人虐殺事件など、事件が頻発した年であった。比嘉は改造社で編集に携わって言論人と接するかたわらで、社会主義運動家と交渉をもち、これらの事件を目のあたりにした。とくに関東大震災後の混乱は、比嘉に沖縄と同様の差別意識の強さを、改めて感じさせることになったようである<sup>42)</sup>。

上京後、比嘉は沖縄在住社会主義者の協力者という立場をとり、沖縄と東京の社会主義運動家をつなぐ役割を果たした。比嘉は「何かと便利な立場にあったので、沖縄へいろいろな連絡をとる窓口のような形になった」<sup>43)</sup>と語っている。仲宗根が加わっていた『無産者新聞』も、野坂参次(後に参三、1892-1993)の『産業労働時報』誌も、比嘉の名前で沖縄に送付されていた。郵便物の差出人の名前が明記されていない場合、郵便局で中身を調べることが可能で、それが思想統制の手段に利用されていた。そのために送付先の相手を守るためにも、送り主の名前を明記しておくことが必要であった。時には沖縄で検束された教員のひとりが、比嘉の名前が明記された封筒をもっていったために、比嘉が警察に連行されるということもあった。

比嘉と警察の関係においては、沖縄県庁に勤めていた頃の安倍源基(1894-1989、以下は安倍)地方課長とのつながりが、上京後の比嘉の活動に役立っている。比嘉が改造社の社員の時、治安維持法違反第一号の公判記録を改造社で出版するという企画がもち上がった。結局、これは出版できなかったものの、その時の内務省警保局長が安倍であった<sup>44)</sup>。思想統制や検閲が厳しさを増すなかで、安倍警保局長の知り合いということによって、係官や警察の取り調べは、それほど厳しくなかったようである。

また1923(大正12)年当時、東京ではエスペラント運動が隆盛であり、講習会や研究会が盛んに行なわれていた。比嘉は1917(大正6)年から日本エスペラント協会の会員になっていたが、ほぼ独習であったために、上京後は講習会や研究会に積極的に参加していた。このエスペラント語も社会主義運動の協力の一手段となっていた。プロレタリア・エスペラントの仲間とともに、比嘉の自宅で学習会が行なわれ、この学習会は自宅のあった柏木の地名から「柏木 Rond」とよばれた<sup>45)</sup>。Rondは団を意味するエスペラント語である。この柏木 Rond ではレーニンの『国家と革命』などが輪読された。当時は治安維持法違反による受刑者に対して、宗教書や法律書以外は差し入れることができなかったが、学習会ではエスペラント語の学習と

いうことで、社会主義関連の書籍を差し入れようという提案もなされる。

そして後年、比嘉は「左翼文化運動が起こった時、このロンドを基盤に日本プロレタリア・エスペラント同盟が結成され、他の文化団体とともに革新運動に加わった」<sup>46)</sup>。比嘉はロンドを通じて、社会主義運動の協力者から、中心的な運動家ではないものの、実際的に行動をする人へと変わっていく。この比嘉の役割については、「社会運動の前面には出ないけれどその縁の下を支える、いわばこの時代の伴走者としての比嘉春潮の存在は際だって、(中略)暗い谷間の社会運動の伴走者」<sup>47)</sup>であったとされている。比嘉が実際に警視庁に呼ばれて、取り調べを受けた際には、「私は、機関誌や教科書などを取り次いでいるのだ、二割の手数料が入るので、金になるんですよ」<sup>48)</sup>と答えている。沖縄在住の時の英語と同様で、取り調べをかわす手段として、エスペラント語が利用された。

#### 4 インフォーマントの意識

比嘉は社会主義運動に関わる一方で、改造社という出版社に勤めている関係で、事実や情報や伝えることの難しさを知る。後に比嘉は自身の役割をインフォーマントであったと語っているが、改造社での勤務を通してインフォーマントとしての意識が芽生える。とくに作家の広津和郎(1891-1968、以下は広津)の沖縄に関する小説をめぐる事件は、インフォーマントとは何か、そしてその役割が如何に重要なものであるかを知るきっかけを与えた。

比嘉は改造社時代に広津と仕事の関係で知り合いになる。この広津は1926(大正15)年3月号の『中央公論』誌において「さまよへる琉球人」という小説を発表する。この小説は大きな波紋を投げかけるが、とくに沖縄に対する差別意識が根強く存在しているということを明らかにした。広津自身には沖縄に対する差別意識はなく、むしろ沖縄人に対して同情的であり、沖縄人のおかれた境遇に関して理解を示すような姿勢で書かれた作品であるといえる。しかしこの小説は誤解を与える内容が含まれているとして、広津に対して「沖縄青年同盟」<sup>49)</sup>から抗議文が寄せられる<sup>50)</sup>。

「さまよへる琉球人」は、作者と思われる「自分」と、見返民世(以下は見返)という琉球人との奇妙な交渉を、私小説風に綴った作品である。作品の概略をいささか長いが説明する。見返は社会主義者とも交友のある文学青年であるが、琉球の状態について「琉球の中産階級は、殆んど今滅亡の外ないのですよ。甘蔗はこしらえても売れない。いや、問屋と内地の資本主義とが協力しているので、売れても二束三文です。それを二束三文に売っても、生活がなり立ちません。それで憤った青年達は、それを売らないのです。が、売らなければ尚飯が食えない。売ろうとすれば、見す見す資本家共の餌食になる。それに税金が高い。あんた」と興奮しながら説明する。こういう話を聞いて「自分」は義憤を感じる。それまで見返は数々の不信行為を重ねているが、これを聞いて同情的な気持になる。「自分」は「実際、長い間迫害を受けてい

たら、その迫害者に対して、信義など守る必要がないようになって来るのも無理はない。<sup>ほ</sup>めた話ではないけれども、或同情の持てない話ではない」と思う。

さらに見返は同じ琉球人の文学青年による不祥事に関して、「琉球人はあれだから困るんだ。『さまよへる琉球人』と云うような詩を作ったりしたのはあの男なんです、琉球人は、つまり一口に云うと、内地で少しは無責任な事をして、当然だ、と云ったような心持を持っている点があるんですよ。無論全部の琉球人がそうではないんですが」とひとり言のように語る。それをきいて「自分」は、なるほどと思い、「徳川時代以来、迫害をつづけられたので、多少復讐—と云わないまでも、内地人に対して道徳を守る必要がない、と云ったような反抗心が生じたとしても、無理でない点がある事はあるな」と思う。

広津の作品は、こういう感慨をもちながら、淡々と描かれたものである。比嘉によれば、広津はソテツ地獄が問題となっていた沖縄に大きな関心を寄せていた。作品は沖縄人に対してむしろ好意的に書かれたものであった。沖縄青年同盟から「広津氏の沖縄県民にたいする「御同情ある観察」には感謝するが、しかし沖縄県民について誤解を招くおそれがある」と抗議がある<sup>51)</sup>。とくに沖縄経済が破綻している状態のなかで、県外に出稼ぎに出る青年が多く、内地では沖縄県人は「リキジン」と差別されていた。とくに阪神地方の工場では「朝鮮人、琉球人おことわり」の張り紙が見受けられ、出稼ぎ労働者の差別待遇は大きな問題となっていた。このような状況の中で、この作品が発表されることは、事態をさらに深刻化させるというのである。

この抗議に対して広津は、「自分はこの抗議書を何回も繰返して読んだ。そして読む度に自分の心は重くなり、取返しのつかない事をしたという苛立ちと苦悩とに悩ましくなっていた。唯自分はこれだけの事は認めて頂きたい。というのは、ああした空想が沖縄県人諸氏に累を及ぼそうなどという事を、毫末も予想していなかった事、いや、寧ろ作者は心の底から沖縄県人に厚意を持ち、沖縄県を今日のような状態にさせるに至った外部からの暴力—昔からの引続きの暴力に対して、憤懣を抱いているという事を。—自分のそうした心持から浮んだ感想が、動機に於いては厚意であるべき筈のものが、結果に於いて、あなた方を却って害する事になってしまったという事は、何としても、自分の不明の致すところです。自分はその結果に対して、何処までもあなた方にお詫びしたいと思います<sup>52)</sup>」と答えている。

この広津の回答は沖縄県民や出稼ぎ労働者を感動させ、その後、広津に対する尊敬の念まで起こったとされる。広津のいう「不明の致すところ」とは、沖縄に対する差別を見落としていたということである。比嘉によれば、広津自身には差別の意識がまったくなかったかもしれないが、差別が社会的に存在するという事実を認識していなければ、このようなことが起こってしまう。広津は沖縄人の迷惑となるので、「さまよへる琉球人」は、二度と印刷しないと宣言する。広津は抗議文の全文と、この沖縄青年同盟に対する回答を、同年5月号の『中央公論』誌に発表する。そしてこの宣言通りに『広津和郎全集』には沖縄青年同盟の抗議文だけが収録

され、「さまよへる琉球人」は掲載されていない。広津は沖縄青年同盟との約束を守り続ける。

比嘉は、この小説は当時の沖縄人の一面をよく描いているので、葬り去られるのはたいへん惜しいことだと語っている。比嘉は小説の内容を評価する一方で、真意を伝えることの難しさを知る。フィクションであるが故に、事実を際立たせ、真意を伝えようとしている。比嘉はその点を十分に評価している。しかし、その真意は社会的脈絡のなかでこそ伝わるものである。広津の作品は差別を糾弾するものとも、あるいはまったく逆に助長するものともとらえられてしまう。比嘉はたとえフィクションといえども、それを伝える場合に、その社会的脈絡を十分に考慮しなければ、真意が伝わるどころか、誤解を与えてしまう場合のあることを知る。

比嘉は後にインフォーマントとして活動することになるが、単に事実や情報を伝えているわけではない。事実や情報は社会的脈絡のなかで受け止められ、解釈される。その点を考慮することによって、インフォーマントの役割が果たせる。それまで比嘉には、おそらくインフォーマントの自覚はなかったが、広津の作品をめぐる問題を通して、そういった意識が芽生えた。

## 5 民俗学との出会い

比嘉は伊波とともに柳田から多くの影響を受けている。研究上での柳田とのつながりは、偶然ともいえるものであった。比嘉は「私がはじめて柳田国男先生にお目にかかったのは、先生が那覇の県立図書館に伊波先生をお訪ねになった時であった。私はその頃、県庁の地方課に勤めていたが、県庁と図書館とは同じ構内にあって毎日ほとんど伊波先生にお目にかかっていた頃で、柳田先生がお出でになると、伊波先生が直ぐに電話で呼んで下さるので、両先生のお話を始終側で聞くことができた。ある日、私は突然、宮古島に出張を命ぜられて先島行の船に乗ると、思いがけなく柳田先生が既に船上におられた。これから宮古、八重山を御観察というのであった。宮古までの船中と平良町の旅館で、ゆっくりといろいろ学問上のお話まで承わる機会を得たのは、まことに偶然の幸いであった」<sup>53)</sup>と語っている。

柳田はこの時、著書『海南小記』の旅の途中であったが、比嘉の事情はやや複雑であった<sup>54)</sup>。その事情を柳田のほうが書き留めている。柳田は「大正十三年から昭和三年までのふるい日記を出してみると、いちばん度々出て来る名前は、琉球出身の比嘉春潮君であつた。(中略)はじめて会つたのは大正十年一月のことである。(中略)県の地方課の役人であるのに、その船に偶然乗り合はせてゐたのだつた。どうしたのだと聞いてみると、県の役人をしながら、中央でアナキストとして知られてゐた岩佐作太郎と交際してゐた。しかもその岩佐が来島するといつて来たので、県当局が気をきかし、比嘉君に宮古島の選挙の模様を見て来いとか何とか用事をこしらえて出張させてくれたといふ話で、その宮古島へ渡るときだつたのである」<sup>55)</sup>と回想している。

当時の比嘉は学問を志すというよりも、社会主義運動に対する関心のほうが強かった。この

関心は上京後も続くが、そのかたわらで柳田を訪ねていた。ちょうどその頃、柳田を中心に沖縄の民俗研究が活発に行なわれていた。後に比嘉は、沖縄の民俗研究は三期に分けられるとし、柳田の来島がひとつの区切りと考えている<sup>56)</sup>。第一期は古代から廃藩まで、この時期には内外で民俗資料の記録がなされ、首里王府が施政上の必要から編集著述した史書や由来記類などが、それにあたる。さらにこれらの資料だけでなく、中国、日本、ヨーロッパなどの文献に著された民俗に関する記載も含まれるとしている。そしてこれらの民俗資料の背景には、沖縄をひとつの国として扱っている点があった。

第二期は1879(明治12)年の廃藩置県から1921(大正10)年頃までの時期である。沖縄が日本のひとつの県となり、沖縄に滞在した人や沖縄在住の研究者によって著される。たとえば外来者では、田代安定(1857-1928)の調査報告や論文、田島利三郎(1869-1931)や加藤三吾(1865-1939)らによって『人類学雑誌』へ投稿された調査報告、笹森儀助(1845-1915)の『南島探験』、一木喜徳郎(1867-1944)書記官の『沖縄県取調書』などがある<sup>57)</sup>。一方、沖縄在住の研究者では、友寄喜直の「琉球における盲信、俗伝および児童語」(『人類学雑誌』)、伊波の『古琉球』や『沖縄女性史』、島袋源一郎(1885-1942)の『沖縄県国頭郡志』などがある。これら第一期と第二期の資料や研究は、主に政治の中心である首里と那覇を対象にしたものが多く、あるいは奇習異俗に焦点があてられたものであった。

そして第三期は1921(大正10)年の柳田の来島をきっかけに、学界で沖縄民俗への関心が高まり、本格的な調査研究が行なわれた時期である。比嘉にとって、柳田の来島は大きな意味をもち、それまで沖縄で蓄積された資料や研究業績を、民俗学という枠組みで整理するきっかけを与えたといえる。柳田は沖縄から帰京後に、1922(大正11)年に「郷土会」のメンバーに在京県人を加えて、「南島談話会」を設立する。これによって南島民俗に関する共同研究が始まるが、中央学界における沖縄研究のきっかけを与えるものであった。

もっとも比嘉が上京した1923(大正12)年には、柳田は国際連盟委任統治委員となってジュネーブへ赴任するので、日本を留守にしていた(この年の関東大震災の後、柳田は急きょ帰国する)。帰国後、柳田は1924(大正13)年に「南島研究の現状」と題する講演を行ない、翌1925(大正14)年には前述の『海南小記』を発表する。南島談話会は1922(大正11)年4月から1933(昭和8)年5月まで開催され、不定期に24回の会合がもたれている。この会合には約20名の在京沖縄県人が参加していたが、比嘉は「大正11~12年から昭和8~9年にかけて学界の沖縄民俗研究は非常に盛んなものだった」と語っている<sup>58)</sup>。

しかし比嘉は上京後すぐに、南島談話会に参加していたわけではない。伊波の上京後であった。1925(大正14)年に沖縄県立図書館長であった伊波が館長職を辞して、翌1926(大正15)年に校訂作業を終えた『おもろさうし』をもって上京する。比嘉はこの伊波の「お伴をして柳田邸を訪問した。それ以来、しげしげと足を運ぶようになった」<sup>59)</sup>のである。伊波と比嘉は、この年から南島談話会に参加する。そして1927(昭和2)年の例会には、伊波や比嘉の他

に、金田一京助（1882-1971）、富名腰（船越）義珍（1868-1957）、金城朝永（1902-1955、以下は金城）、岡村千秋（1884-1941）、島袋源七（1897-1953）、そして社会主義運動家の仲宗根らが出席している。この年以降は、比嘉と金城とが南島談話会の常任幹事となり、後に金城は『南島談話』誌（1931～32年）の編集を担当している。

南島談話会が沖縄民俗研究を活発化するきっかけを与えたことは確かである。比嘉は1926（大正15）年に『民族』誌に「沖縄本島の神隠し」という、比嘉にとって初めての論考を発表している。しかしながらその後、比嘉による論考の発表は途絶える。南島談話会は1928（昭和3）年2月から1931（昭和6）年6月まで中断し、同年7月に再開する（この再開時に『南島談話』誌の隔月発行が決められる）。比嘉によれば、南島談話会は「たいてい柳田先生が題を出し、言葉のこととか、習俗のこととか、みんな自分の知っていること、研究していることを話した。時には先生が沖縄と他の島々のことを比較して話されるなどして」<sup>60)</sup>、という形で進められたようである。

## 6 インフォーマントと研究

比嘉による論考の発表がなかったのは、南島談話会が中断したためではない。比嘉は社会主義運動への関心を引きずっていたため、民俗研究に本腰を入れなかったためであるとも考えられる。もっともそれだけではない。比嘉は当時の心境について、

私は東京に出てから、沖縄の言語や民俗を対象とする学者にしばしば接触するようになったが、そういうばあい、私はいつでも単なるインフォーマント（資料提供者・報告者）であった。柳田先生に対しては、特にこの限界を守って来たつもりである。民俗についても言語についても、私は自分の出身地である首里と西原を中心とする地域に限って、私自身の直接見聞きし、体験したことだけについて話す。ことばのこと、習俗のこと、いろいろな祭りや行事のこと、その場合、自分の実際に知らないところや、経験の範囲を越える古いことについて、聞き伝え、憶測、想像などで発言するのは危険である。私は首里や西原以外については極力断言することを避け、また私の時代にはもうなくなっていた習俗で、父から聞いたことについては、はっきり区別するというように、インフォーマントとしての限界は守ったつもりだ。こういうことは、大したことではないようだが、消えてゆく習俗や言語を正確に記録にとどめて、それを科学的な分析・類推・判断の素材とする以上、いいかげんなことではならない。伝説や俚言などをどう判断し位置づけるかは、また別の問題である<sup>61)</sup>。

と語っている。

比嘉は自らの役割を研究者としてのそれではなく、沖縄民俗に関するインフォーマントと認識していた。柳田民俗学では、全国各地から情報を蒐集して、その分析は中央（東京）で行なうという方法がとられたので、比嘉の情報提供も、その一環であったとみられる<sup>62)</sup>。しかしながら比嘉のいうように、科学的な分析、類推、判断の素材となる「事実」の扱いは慎重でなくてはならない。自分が直接的に見聞したことだけしか伝えられないという姿勢に徹したという。これを比嘉はインフォーマントの限界と語っているが、それは決して否定的な意味ではなく、正確さや厳密性を重視しようとする姿勢を意味する。

比嘉の姿勢は徹底している。「柳田先生が、沖縄の民俗をお聞きになる。わたくしは、自分で見ていること、経験していること以外は話しません。つまり、わたくしはインフォーマント、報告者です。見たもの、経験したものを報告する。いろいろ考えて、こういうことではありませんか、といったことは、けっしていかなかった。例えば、スチューダント、研究者になってしまいます。わたくしは知っている事実だけを報告する人、インフォーマントだということで、信用しているわけだから、自分の推測をつけ加えたりすれば、柳田先生の信用はなくなります。それで、わたくしは、今でも民俗学研究はインフォーマントであって、スチューダントではないと思っています。自分で研究して、勝手に組立てたものはいけないのです。わたくしの沖縄研究の立場も、やはりインフォーマントです。スチューダント、研究する者ではありません」<sup>63)</sup>と強調する。

比嘉は頑なにインフォーマントの立場をとり続ける。比嘉は柳田に対して「先生にお目にかかって以来、私は沖縄民俗の資料提供者としていささかお役に立ったが、先生の方では私を民俗研究者にしようとするお気持ちがあった。私がいつまでも資料提供者以上に進み得ず、先生の思召しにそうこののできなかったことは、まことにすまなかったことと今でも思っている」<sup>64)</sup>とまで述べている。比嘉は経験や事実の「報告」と、比較や分析による自己の解釈や理論化がともなう「研究」を厳密に区別していた。しかしこれは、比嘉があえて研究を避けていたということの意味しない。学問や研究に対して真摯な姿勢をとることによって、経験や事実を伝えることの難しさ、学問や研究を展開することの困難性を訴えている。この点にむしろ比嘉のほうこそ沖縄民俗研究のあり方を示唆しようとする姿勢がうかがえる。

柳田は後年、著書『郷土生活の研究法』において、自らの学問を「新たな国学」と規定している。そしてこの新たな国学によって、沖縄は日本文化（民族）の原基的存在として把握されて、柳田は「我々の学問にとって、沖縄の発見ということは劃期的の事件」<sup>65)</sup>であると語る。柳田のいう沖縄の発見とは、比嘉によって提供された経験や事実が含まれていた。そうであるならば、比嘉は研究をしていないわけではなく、インフォーマントに徹することによって、学問の形成をしていたことになる。

さらに柳田のいう沖縄の発見とは、沖縄的個性の発見に他ならない。この個性という点で、比嘉は前述のように伊波から大きな影響を受けるが、柳田からも影響を受けている。しかしな

がら、比嘉による伊波と柳田の受け取り方には、いささか違う点がある<sup>66</sup>。それについて比嘉は、「柳田は伊波の『古琉球』その他を見て、すぐに沖縄人が日本民族であり、沖縄が古語古俗の博物館であることを知り、沖縄研究を提唱し、第一に着手した。しかし琉球入り後の沖縄の苦難については深い同情を持ちながらも、その持論である、地域的關係から中央の文化の及ばない山村や島嶼民の苦難と相通ずる、いわゆる「孤島苦」であるとし、伊波の「沖縄歴史の趨勢」も、「王朝時代、藩制時代を経て明治になった当座の明るくなった気持ちを主として書こうとしたのではないかと思う」（『故郷七十年』）といい、伊波と会っての話は、おもろや民俗が中心であった<sup>67</sup>と語っている。それに対して柳田については、著書『故郷七十年』から「何島だからねえ」といふやうなことをすぐいふ。八重山とか宮古島とかいふ、割に大きな島でも特殊扱ひされてゐたのだから、もっと小さな離島はかなり別扱ひされてゐたに相違ない。（中略）それが私共が沖縄研究に奮起した原因と、隠れた心理の動機だつたともいへる。沖縄に行つて話した演題を「世界苦と孤島苦」としたのも、そんなわけからであつた。（中略）それ以来沖縄には複雑な内容と気持とをもつた孤島苦といふ言葉が生渡つてゐるらしい<sup>68</sup>」という箇所を引用している。つまり伊波は沖縄人を総体でとらえて、その個性を強調しているが、それに対して柳田は中央集権体制のもとでの沖縄の個々の島の個性に注目していると、比嘉はとらえている。

比嘉は伊波と柳田の違いを際立たせて、批判しているわけではない。重要なことは、インフォーマントとしての比嘉が、伊波と柳田の両者に対して、あき足りないものを感じていることである。伊波に対しては、沖縄のなかにおいて虐げられた人々に対して配慮が足りないのではないかという点、さらに伊波のいう日本への同化という方向性に疑問を感じているという点である。柳田の「孤島苦」への関心は、確かにこの伊波の欠如を補っている。しかし柳田に対しても、虐げられた人々の生活や文化について、ありのままの「事実」の表現だけで良いのだろうかという疑問をもっている。さらに柳田は、伊波が重視している近世や近代の沖縄について、それほど注目していない点に比嘉は物足りなさを感じている<sup>58</sup>。

## 7 沖縄民俗研究への取り組み

比嘉が1926（大正15）年以降、沖縄の民俗に関する論考を発表するのは、1931（昭和6）年の『南島談話』誌における「ホーハイのこと」「フィヂェイザーのこと」などであった。比嘉の民俗学に対する姿勢は、観察者として他の社会や文化を記述しようとするものではなく、自らの体験した文化を内省しつつ、資料の提供を行なおうとするものであった。それは無意識のうちに、少年期から抱いた問題意識や沖縄の社会的脈絡を重視するものであり、決して単なる事実の伝達に終わるものではなかった。

南島談話会は1933（昭和8）年5月を最後に開催されなくなった。すでに1932（昭和7）年

に改造社を退社した比嘉は、翌1933（昭和8）年に柳田と連名で、雑誌『島』を発刊し始める<sup>70</sup>。この雑誌は、それまでの『南島談話』誌では沖縄や先島をはじめとする南西諸島を対象にするだけであったのに対して、それ以外に隠岐や瀬戸内海の島々、伊豆諸島や陸前の諸島など、日本全国の島々を対象としたものであった。この雑誌『島』において、柳田は『漁村語彙』などの論考を、比嘉は「翁長旧事談」などの論考をそれぞれ発表する。しかしこの雑誌は出版元の一誠堂が経営難に陥ったために、1934（昭和9）年には雑誌を発行する金銭的余裕を無くす。この時すでに原稿は集まっていたので、最後に書籍の形で刊行して廃刊となる。

比嘉は1935（昭和10）年に改造社に復職する。改造社では『ゲーテ全集』を刊行することになり、比嘉に対して復職の話が来たようであった。比嘉は「二年間の雑誌経営で、私には出版事業経営の才はないものだと思うようになった」<sup>71</sup>と自戒を込めて語っている。この比嘉の反省の弁からもわかるように、雑誌『島』発行については、比嘉は研究者の立場というよりも、柳田の研究補助的な役割を果たしたようである。柳田は比嘉に対してインフォーマントの役割を果たすように期待した。

雑誌『島』で発表した「翁長旧事談」は、比嘉が17歳まで過ごした西原村翁長についての報告である<sup>72</sup>。この報告は雑誌『島』に3回にわたって連載された。明治20年代の沖縄の農村生活について書かれているが、項目別に並べた型通りの報告ではない。儀礼の内容や祭祀組織の構成などの必要項目は満たしている一方で、村人の「生き生きとした」表情や生活のあり方が伝わってくる<sup>73</sup>。これは自分の経験によって得られた文化を表現しているからである。つまり比嘉にとって事実を報告するというのは、無味乾燥な調査項目を記述するのではなく、生身の人間の姿を克明に伝えるということであった。それはおそらく報告者自身が経験した事象でなければ困難なことであった。

しかしこの点に比嘉の思いとは裏腹に、民俗学のインフォーマントとしての限界があった。なぜなら、たとえば行事の分布や意味の解明などを行なうときに、生身の人間の姿を克明に伝えても、民俗学的な分析はできないからである。とくに比嘉の方法は、柳田が使った各地域の民俗を比較して分析する方法とはなじまないものである<sup>74</sup>。しかし、これはむしろ限界とはいえない。というのは比嘉はインフォーマントの限界というよりも、民俗学上のインフォーマントの範ちゅうを超えていたのかもしれないからである。

柳田は1933（昭和8）年9月中旬から12回にわたって、成城の自宅で毎週木曜日に「民間伝承論」の講義を始める。この講義には当初から大藤時彦（1902-1990、以下は大藤）、大間知篤三（1900-1970）、後藤興善（以下は後藤）、杉浦健一、そして比嘉らが参加していた。参加者は徐々に増え、この講義は柳田を中心とする研究会の「木曜会」へと発展していく。木曜会は柳田を囲んで和歌森太郎（1915-1977）、関敬吾（1899-1990）、最上孝敬（1899-1983）、大藤らに比嘉を加えた6~7人のメンバーで開催された。木曜会では島々の民俗だけではなく、さらに広く全国の農山漁村を対象にした民俗研究が行なわれた。柳田の講義を後藤が筆録し

て、翌1934（昭和9）年8月に『民間伝承論』（共立社書店）として刊行された。そして1935（昭和10）年7月から8月にかけて、柳田の還暦を記念して開催された日本民俗学講習会を機に「民間伝承の会」が結成され、同年9月に機関誌『民間伝承』が創刊された。これは戦後の1947（昭和22）年に民俗学研究所として再出発しているが、現在に至る日本民俗学会の基礎となるものである<sup>75)</sup>。

比嘉は柳田の「民間伝承論」の講義や1934（昭和9）年に発足した木曜会に参加して、民俗学への造詣を深めていく。木曜会の発足当時の比嘉については、「博学善識の才能、後世恐る可しと認められたか、比嘉春潮は校正系の権威、（中略）改造社を退いて柳田國男と共に民俗雑誌『島』の編輯に従事して居るが、島国琉球出身者として適所を得たるもの、比嘉春潮自らの座席を発見したるものとして郷党は喜んで居るが、一部の友人では彼を次代の県図書館長に噂で任命して居る」<sup>76)</sup>と評されている。比嘉は沖縄出身者として、沖縄民俗学を推進できる人材であると認識されていたようであり、県立図書館の館長こそ、比嘉に相応しい職と考えられたようである。

沖縄に関する民俗において、比嘉が自ら考えていた役割（インフォーマント）が生かされたことがあった。それは古代沖縄人がどこからやって来たのかという問題が議論されたときである。周知のように柳田はその渡来について、当時の学説に対して異論を唱えた。沖縄では東西南北をアガリ、イリ、ハエ、ニシという。言語学の金沢庄三郎（1872-1967）は、北をニシというのは「いにし」、つまり「去にし」の意で、古代沖縄人が北からやって来たことを示しているという説を唱え、それが定説となっていた。しかし柳田は「いにし」というのは「行った」という意味であり、こちらから向こうへ行ったということであると説明した。むしろ古代沖縄人は一部が北の方へ行ったということであり、もし「きた」というのであれば、「こし」というべきであると語る。中国では漢民族のきたところを「越」といい、日本でも「越の国」というのは、氏族が渡って来たところに名付けられていることもあると説明する。

そして柳田と伊波では、沖縄人の祖先の渡来に関する想定で、大きな違いがあった。柳田は著書『海上の道』で自らの主張を記している。日本人の起源は舟で南から来たという点は「私といえどもまだ想像説にとどまっているにすぎない」<sup>77)</sup>として、北から来たものと考えなくては説明のつかない事実もあり、二つの系統があるとしていた。これに対して伊波は、稲作技術は南から伝来したとしても、人は本土の方から南進してきたという説を立てていた。比嘉は軽々しく断定できないとしているものの、どちらかという伊波の説が実際的ではないかと考えていた。

その後、様々な学説が出されているものの、現在に至るまで断定的なものはない。柳田と伊波との関係も、単に主張に食い違いがあったという程度で、もちろん深刻な対立関係にはなっていない。むしろ比嘉によれば、柳田による伊波への批評は、比嘉によって伊波に伝えられ、伊波の研究傾向を左右したようである。たとえば、柳田が「伊波君は、沖縄の地方の方言の研

究をもう少しやらなくてはだめだね」と批評したことを、比嘉は伊波に伝えている。その後の伊波の研究は、地方の古語にも研究の手を広げて展開しているので、柳田の忠告を率直に受け入れたことがわかる。柳田のほうも伊波の研究業績を評価して、「これより後、だれがおもろを研究するにしても伊波君のうち立てた基礎によるほかはなかり」と語っていた<sup>78)</sup>。この一連の研究の流れのなかで、比嘉は沖縄の社会的脈絡を知る者として、また民俗学の現状を知る者として、その存在感を示している。伊波や柳田とは異なった意味で、沖縄民俗研究を支えたといえる。

金城は南島談話会から続く沖縄研究について、「柳田先生の世話で別に沖縄出身者のみの沖縄土俗談話会が、その分身として創立され、後に、これが南島談話会を襲名、沖縄研究（主として民俗学的）の中心となり、学界でもその名を知られていました。やがて昭和8年頃からは全く柳田先生の手を離れて、名称も南島文化協会と改め、講演会の外に、機関誌『南島談話』（金城編集）の発行もやっていましたが、大戦末期に、その活動は全くの休止状態に陥り、終戦を迎えた」<sup>79)</sup>と語っている。沖縄民俗研究が徐々に独自の歩みを始めたようである。この南島文化協会の活動については実態が明らかでないものの、郷土の文化を研究する団体が、やがて改姓運動など生活改善運動全般に関心を寄せ、やがて「沖縄生活更新協会」と関わりをもつようになった<sup>80)</sup>。沖縄民俗研究は研究対象を広げると同時に、救済や差別問題を取り上げる沖縄研究へと展開していく。

## 8 戦時下の沖縄研究

戦時下における比嘉は、民俗学に関する研究会（とくに組織化）だけに注力していたわけではない。「沖縄の言語や民俗を対象とする学者」に接触する場合に、「いつでも単なるインフォーマント」としての立場を保持したと語っているが、単に情報や資料の提供をしていたわけではない。比嘉は「ほんとうに自分のための読書ができるようになったのは、いよいよ出版もだめになった、統制中の太平洋戦争中だった」と語っているように、戦時下においてこそ「沖縄研究」に情熱を傾けていたようである。この研究成果は戦後になって発表され、比嘉はそれについて「沖縄学」という用語を使うようになる。

比嘉は1937（昭和12）年3月末に大阪へ赴き、大阪南島文化協会主催による座談会に出席している<sup>81)</sup>。この座談会では改姓運動や服装改善に関する話題が取り上げられた。比嘉は「今後もこういう会を益々盛にして東京と研究の交換をして、沖縄文化の紹介につくしたいと思っています」と発言している。座談会では沖縄の貨幣や中国との関係などの歴史文化に関する話が行なわれ、その後に沖縄の改姓運動について議論が交わされている。

比嘉は改姓運動に関心があると述べた後で、「慶長年間に島津が大和人にまぎらはしき姓を故意にかへさせた事がありました。例えば私の比嘉も東だったろうと思います」と語る。さら

に続けて「明治以後は沖縄も全国との接触が多くなったので、どうしても日本的に通用するものでないと困る場合が多い（中略）私の比嘉も沖縄ではヒチヤですが、今ではほとんどヒガで通っています。こういふ軽い意味の改姓は現在の私共の日常生活上已むを得ない事」であり、「沖縄でも此頃普通通りに読む事、如何に読みかえるべきかという事が問題になっている様ですが、改姓の必要に就いては皆様が実際に困った経験を沢山お話して下さい。事例を沢山あげて其の中に共通点があれば、世論に訴えて一時に解決出来るかも知れないと考えています。又それを東京の御土産ともしたい」と語る。比嘉は改姓によって生じた問題や苦い経験を、できるだけ多く集めたいと語っている。多くの事実を発掘し、その事実を伝えたいということである。しかし、これは単に事実を右から左へと流そうとするインフォーマントとしての発言ではなく、社会問題を改善しようという目的意識に支えられた発言であった。

この座談会に現われているように、比嘉をはじめとする在本土沖縄県人は、沖縄の歴史と文化に関心を寄せ、それによって愛郷心を涵養しつつ、本土で暮らす現実と対峙して、改姓などの生活改善運動を推進しようとしていた。この動きは比嘉を橋渡し役として、やがて在沖縄県人にも波及し、在本土と在沖縄の県人が共鳴し合うことになる。比嘉が戦時体制下において沖縄研究に没頭できたのは、もちろん戦時体制と自らの関わりを断っていたからではない。むしろ沖縄という故郷の命運を気遣うことが、沖縄研究に意識を向けさせた要因であった。しかし意識が高まったとはいえ、研究成果は戦時下においては出せない。戦時下での意識の高揚は、戦後になって沖縄の再建運動と執筆活動の原動力となっていった。

戦時下の生活改善運動において、在本土沖縄県人の親泊康永（以下は親泊）は、その推進者のひとりであった。親泊は上京後に賀川豊彦（1888-1960）と出会い、道連れ会や消費組合運動といった形で生活改善を訴える。その一方で、『沖縄よ立ち上げ』（新興社、1933年）などにおいて沖縄の自力更生を訴え、沖縄県振興計画を批判していた。比嘉はこの親泊を支援していた。比嘉と親泊は、思想や宗教上の立場は異なっていたとはいえ、お互いに「其の情熱、其実行力、其の真摯な態度」に動かされ、敬意を払う同士となった<sup>82)</sup>。

1938（昭和13）年2月に親泊は比嘉らの賛助を受けて、「生活改善期成会」または「文化向上促進同盟」といった機関を組織するために、東京と大阪の発起人の内諾を得て、沖縄へ向かう。沖縄では太田朝敷（1865-1938、以下は太田）らと話し合い、その実現に向けて運動を行なう<sup>83)</sup>。この運動に呼応する人物も現われて、沖縄県民の生活改善を進める機関として、「沖縄生活更新協会」が創立される。そしてこの協会は沖縄県内だけでなく、東京、関西、さらに台湾にもネットワークを広げていくことになる。

こうして比嘉をはじめ在京沖縄県人は、沖縄、東京、関西、台湾などで沖縄県人のネットワークを結び、情報の共有化を図っていった。沖縄県下の米配給制度の実態、島袋全発（1888-1953）の図書館長辞任問題、方言論争の影響や各界の動向など、比嘉は沖縄に関する情報を金城や八幡一郎らとともに受け取るなど、ネットワークを生かして情報交換を行なった<sup>84)</sup>。

1939（昭和14）年に比嘉は金城や親泊ら9名のメンバーで「ナインクラブ」を結成し、琉球紙に日曜通信を送っている。翌1940（昭和15）年には沖縄研究を目的として、比嘉、金城ら7名のメンバーで「七星会」を結成している。郷土沖縄に関する情報に関心をもち続け、沖縄に関する情報交換の発信元あるいは受け皿となっていった。

沖縄に関する情報交換を目的とする組織化が進むなか、1940（昭和15）年に方言論争が起こる。これは吉田嗣延らの沖縄県学務部と、柳宗悦（1889-1961、以下は柳）らの日本民芸協会同人との間で始まった論争であった<sup>85)</sup>。簡単に言えば、標準語を徹底させたい沖縄県学務部と、方言を尊重したい日本民芸協会との論争であった。これは『琉球新報』紙、『沖縄日報』紙、『沖縄朝日』紙で取り上げられたことをきっかけにして、各紙で毎日のように取り上げられ、方言論争は当時の沖縄で社会的関心の強いものとなった。この論争において比嘉は、沖縄県学務部からは在京県人として、日本民芸協会からはインフォーマントとして、双方の側から意見を求められる。

比嘉は、標準語問題は生活改善運動のひとつとして検討すべき重要な問題であると考えていた。標準語励行について、比嘉は「私も必要だと思います。ゴコチなく、不快で耳障りな事もあるだろうが、それは過渡期として仕方ないと思う。ポスターもやり過ぎではない琉球語と標準語との交換云ふ様な機関、例えばこの琉球にはどう云う標準語を適用したら良い、と云った様な機関を作るといいと思う。方言の保存はレコードにしてでも」と発言している。比嘉は標準語励行については、すでに動かし難いものと認識し、方言の保存については民俗学的な発想で行なうべきであるという立場をとっている。

言語学者としての伊波も、当時、方言の利用について見解を示している。伊波の発言は、方言が生きた社会の所産であるという実態を十分に認識して、言語と社会とのかかわり方に関する洞察に基づいたものであった。つまり標準語の奨励は認めるものの、教育行政の指導方針として方言を弾圧し、必要以上に標準語の励行運動を進めることは好ましくないという見解であった<sup>86)</sup>。この点で伊波の見解は比嘉と類似であった<sup>87)</sup>。つまり両者とも標準語の奨励は、ある程度認めるものの、方言の保存や利用の必要性もあると訴えている。

方言をめぐる議論が起こっているなかで、比嘉は柳と柳田との対談の場に臨むことになる。比嘉は対談では、沖縄県人の立場で発言を求められる<sup>88)</sup>。比嘉は、琉球の新聞記事に基づいた発言であると断った上で、「柳先生御一行に対する問題」だけではなく、県庁と新聞社、選挙の関係などが入り込んだために、論争になっていると指摘する。つまり方言論争は沖縄の文化という問題ではなく、むしろ政治や社会の問題が前面に出て、それをあおっているので関心を集めているにすぎない。そうかといって、方言の問題は軽々しく扱う問題でもない。比嘉は新聞の情報だけでは、今後の問題に立ち入ることはできないとした上で、「沖縄の言葉の問題にはいろいろ歴史的な関係をごさいますて、なかなか簡単にはゆかないことを、今度の問題でも悟りました」と語っている。

対談では柳が、沖縄県庁には沖縄文化に対する尊敬が足りないと指摘する。これに対して比嘉は「唯わたくしなどの感じたことは、皆さんの琉球語の価値評価が、余り琉球の工芸に良い所があった為に、言葉に対しても日本語の中に於ける価値評価が少し高すぎはしなかったかということでした」と発言している。比嘉は民芸協会による「沖縄文化の尊重」に対していささか違和感をもち、沖縄の言葉や文化と、工芸とを混同しているのではないかという疑義を發している。過度ともいえる文化の尊重によって、今後の沖縄の生活に差し障りが出るのではないかと危惧する意見であった。

## 9 社会経済史的な視点

比嘉は1944（昭和19）年1月に再び改造社を退社し、同年2月に小山書店へ入社する。小山書店には戦後の1950（昭和25）年まで勤めている。編集者という職業は、情報の交換という点から何かと便利であった。インフォーマントの役割やネットワークづくりに熱心であった比嘉にとっては、この上ない最適な職種であったといえる。

戦後の1947（昭和22）年になって、戦前から沖縄研究を行っていた沖縄出身者が集まって、文化活動の機関として「沖縄文化協会」を設立している。その目的は「沖縄文化の研究紹介、沖縄文化資料の複製・収集・刊行、他の沖縄文化研究者との連絡・協力を行ない、もってその復興発達に寄与したい」<sup>89)</sup>ということであった。沖縄文化協会には、比嘉をはじめとして仲原善忠（1890-1964）、宮良当社（1893-1964）、島袋盛敏（1890-1970）、島袋源七、崎浜秀明（1912-2004）らが参加する。沖縄文化協会は、当初は「おもろ」の研究会を開催し、翌1948（昭和23）年からは公開講演会を開催するようになり、会報『沖縄文化』の刊行なども行なっている。比嘉はそれまでの経験を生かして、主に『沖縄文化』誌の編集発行にあたっている<sup>90)</sup>。

比嘉は編集発行だけでなく、1950（昭和25）年から1951（昭和26）年にかけて、『沖縄文化』誌に「沖縄の農民生活」という論考を發表する<sup>91)</sup>。比嘉はその冒頭において、「沖縄古来の文化発展の跡を探求することを目標とする吾々にとって、沖縄人の社会生活がどんなであったかを知るのは基本的課題の一つである」として、主に社会経済史的視点から沖縄の農民生活をみることの重要性を訴えている。比嘉は元々、沖縄史への関心から沖縄研究に取り組み、社会主義運動にも関わったことから、社会経済史的な視点を重視するのは、いわば当然であった。戦後という環境の変化が、元々もっていた社会経済史的な視点を浮かび上がらせたのかもしれない。

「沖縄の農民生活」は沖縄本島の農村における経済生活の概要が紹介されている。とくに土地整理の施行によって、土地の私有制が採られたために、村人が食生活においても、衣料面においても、徐々に那覇などの市街地における経済活動にまきこまれていく様子が描かれている。たとえば、各家ではそれまで綿などの栽培、糸紡ぎから機織りまで行なっていたが、サト

ウキビ栽培の制限が解かれて、その換金率が高まったため、綿の自家栽培が減少したことが記されている。この結果、県外から綿や既製の糸、そして木綿布なども流入するようになった。

比嘉は沖縄の生活が変容していく姿を描く。そして「沖縄人が自分等の社会生活を自分の手で管理する日はいつであろうか」という問題意識が強くなっていく。この問題意識は比嘉の青少年期からの関心を再び呼び起こす。歴史解明への関心の高まりであった。比嘉は次々と研究成果を発表する。1957年に「物語郷土の歴史」（『全集』第2巻、1971年、74～83ページ）、1959年に「被支配階級の生活に重きを―『沖縄の歴史』序文」（『全集』第2巻、1971年、235～7ページ）、1963年に「沖縄」（『全集』第3巻、1971年、109～64ページ）、同年に「沖縄文化史」（『全集』第1巻、1971年、473～587ページ）、1966年に「物語藩史・琉球藩」（『全集』第2巻、1971年、1～55ページ）、そして1967年に「屈辱の歴史からの脱却」（『全集』第2巻、1971年、272～80ページ）などである。

比嘉の沖縄史に関する認識は深化していく。比嘉は自らの沖縄研究の主要課題について、「私が実際に生活した明治初年の頃―つまり鹿児島島の経済的支配を受けていた時代の沖縄の政治史と経済史」の解明であると語り、さらに「いかに薩摩が、経済的支配のために沖縄を搾取したか、琉球を支配してから二百数十年間、薩摩があらゆる術策をもって経済的搾取をし、それがどんなに琉球の人々を苦しめたか<sup>92)</sup>」を解明することであると語る。

比嘉の代表作となる『沖縄の歴史』の刊行は1959（昭和34）年であり、比嘉が76歳のときであった。この著書は1955（昭和30）年から1958（昭和33）年まで『沖縄タイムス』紙に219回にわたって連載された「沖縄民族の歴史」を補筆改題して、一冊にまとめたものである。比嘉は自序において「被支配階級たる庶民の生活に重きをおいて、沖縄の社会発展の跡を描くことにつとめた」と記している。『沖縄の歴史』は、かつて琉球王国という独立国家が存在したこと、その歴史的な意義を認めることによって、日本が平板な単一社会ではなく、多様な個性をもつ地域をとりこみながら歴史的に形成されたという事実を明確に認識することになる。これは日本史像をより豊かにすることにもつながるといえる。

比嘉は1948（昭和23）年に沖縄について、

沖縄人は人種の上から又文化の基調の上から、日本人と同じであることは事実である。だから明治以来半世紀の間に、沖縄民族はまさに日本民族の中に融合しつつあった。しかし今回の戦争の結果、今は政治的に日本と切り離されている、今や沖縄民族は沖縄民族として独自の道を歩むべく運命づけられている。そして又自らの運命を切り開く能力を持っていると信ずる、帰属の請願運動の如きは現実の問題として無益であり、有害であると思う<sup>93)</sup>。

と語っている。戦後、比嘉の精力的な沖縄史研究への取り組みは、戦時体制下での研究蓄積の

成果であり、戦後の米占領下での発表という過程であった。比嘉は自らの著書を出版する際、「沖縄民族の歴史」という書名を考えたようであるが、結局、周囲の勧めで「民族」の文言を削って、『沖縄の歴史』として刊行している。しかしながら、沖縄民族という文言には、比嘉の沖縄県人としてのプライドがにじみ出ている。この点は、比嘉は全集を刊行する際に「本全集を通読してみると、研究の深淺はあるが、全体を通じて沖縄民族を愛する心と真実を求めることについては一貫して変わらなかったと考えている」<sup>94)</sup>として、ここでは沖縄民族という文言をあえて使用していることでも明らかである。

しかしながら比嘉の研究業績では、問題意識の強烈さや沖縄民族への情念の強さがあったとしても、それを表面に出して書いているものは、きわめて少ない。比嘉の歴史観や問題認識は「何を選んで書くのか」という選択の段階で明確にされ、その後は、すべて「事実」に語らせる。比嘉は沖縄の歴史、文化、言語などあらゆる事象に関して、情報や資料を与えるという姿勢を崩していない<sup>95)</sup>。しかしこの姿勢は、事実のかわりに世界観を、認識のかわりに体験を、教師のかわりに指導者を欲した青年たちに向かって、こういった風潮を批判し、「職業としての学問」を説いたマックス・ウェーバー (Max Weber, 1864-1920) の姿を彷彿とさせる<sup>96)</sup>。比嘉は常に沖縄の「事実」を提示するという、インフォーマントの仕事を買ったのである。

たとえば、柳田は著書『海上の道』において沖縄東海岸航路の重要性や、勝連や宮古島のことが、比嘉の『沖縄の歴史』では触れられていないことを指摘している<sup>97)</sup>。これに対して比嘉は、柳田による宝貝と稲作民族渡来の道に関連付けた発想を受け継いで、「私はその後いろいろ研究を重ねた末、宝貝を求めて渡って来たのは、中国南部沿岸地域にいた百越中ペーベトの一小種族であったと考えるようになった。そして百越民族は今日アジアの南方地域に広がっているが、今日日本人の生活文化の中に百越民族の古代生活文化の痕跡らしいものが見出され、しかもそれが沖縄のそれにおいてより濃厚であるのに驚かされる。これで柳田先生の構想を少しでも補うことにならないだろうか」<sup>98)</sup>と記している。比嘉は歴史的事実を見落としたのではなく、現在の生活文化や経済生活に関連付けることを重視して、歴史的事実を慎重に提示していたのである。この点に比嘉のインフォーマントとしての特徴を見出すことができる。

## 10 結びにかえて

比嘉は1974(昭和49)年の91歳のときに、あるインタビューに応じて、伊波や柳田、そして折口信夫(1887-1953)から多くのことを学んだと述べている。そして「わたくしは、自分で研究したものはなにもないです。みんな、ひとの研究を読んでおるだけです」と語っている。さらに「わたくしは永年、沖縄人の研究をやってきたが、わたくしが本にするために書いたのは『沖縄の歴史』がはじめてで、しかもあれ一冊だけです」と付け加えている<sup>99)</sup>。しかしながら比嘉の禁欲的ともいえる言葉とは裏腹に、当時はすでに沖縄タイムス社から『比嘉春潮全集』

(全5巻)が刊行され、半世紀に及ぶ沖縄研究の業績がまとめられていた。内容も歴史、民俗、文化、自伝と多彩であり、決して他人の研究をフォローしただけのものではなかった。

比嘉のたどってきた人生は、近代沖縄の歩みであり、苦悩でもあった。比嘉はひたすら実践の中で、生きて行く道を選んだ。西原での少年期、20歳代から30歳代前半の教員時代、30歳代後半の県庁役人時代、40歳代の改造社時代が大きな節目であった。思想的遍歴については20歳代にはキリスト教とトルストイズムの影響を受け、30歳代から40歳代前半にかけては社会主義思想の影響を受けた。その後40歳代後半から沖縄研究に本格的に取り組んだ。比嘉は沖縄研究に対する感慨を回想して、「十七世紀初頭から今日まで、三百六十年間の沖縄の歴史は、忍従と屈辱の歴史である。このことを忘れて、現在の沖縄問題を考えることはできない」<sup>100)</sup>と語る。比嘉は近世から近代、そして現在に至る三百六十年間にわたる沖縄の歴史の重みを背負って、その忍従と屈辱の視座から、思想的遍歴を重ねた。

思想的遍歴を通して、比嘉のなかにあった沖縄民族への思いが、戦前と戦後の沖縄研究をつなげ、在本土と在沖縄の県人とをつなぐ架橋の役割を果たした。この点で比嘉は時間的にも空間的にもインフォーマントとしての役割を果たすことによって、沖縄研究の展開において重要な位置を占めたといえる。この比嘉の影響は決して小さなものではない。たとえば1955(昭和30)年に比嘉の自宅で始まった「沖縄歴史研究会」は、1959(昭和34)年までに80数回の会合がもたれ、そのなかから外間政彰(1924-1996)、由井昌子、新里恵二、岡本恵徳などをはじめとして、数多くの沖縄研究者が育った。その多くは、現在まで沖縄のあり方、沖縄の自立などを研究テーマとして活動している。

比嘉の社会運動や沖縄研究は、強い仲間意識で結ばれた関係に基づいていたともいえる。比嘉自身はインフォーマントとしての役割を担い、その結びつきを重視した。比嘉は1955(昭和30)年に、沖縄出身の学生から沖縄歴史研究のチューターになってほしいという要請を受けた<sup>101)</sup>。比嘉は「一言のもとに喜んでこれを引き受け」るが、この研究会は比嘉の私宅で約5年間、80数回も続く。比嘉はインフォーマントとしての役割を如何なく発揮し、学生の仲間にとけ込んだ。その姿は「ユーイユガシラ(雑魚の大将)」の風格であり、けっして「宗匠」というものではなかったと評される。比嘉の姿勢は、閉鎖性や孤高とは対極にあるものであり、自ら運動の中心にいて権勢を張ろうとする志向とは全く無縁であった。これが比嘉への信望を生んでいた。そしてこの信望は多くの仲間意識を支えた。信望がもたらす好影響は、仲間とともにあり人びとの環のなかにいるという意識を生み出した。そしてこの意識こそが多くの沖縄研究者の支えになったであろうことは容易に推測できる。

晩年になってから数多くの論考や著作が発表されているように、比嘉による沖縄研究のスタイルは、一時期にその生涯の全エネルギーを燃焼してしまうというのではなく、生涯を通じて時代と向き合いつつ、歩みを止めることはないというものであった。それは比嘉が上記の研究会について、「私はこの会に参加して新進学徒に接する楽しみとともに、自分の研究の上に

大きな利益を得たと思った」<sup>102)</sup>と語っていることに、端的に現れている。

比嘉はインフォーマントの役割に徹したが、1960年代の沖縄復帰運動に際して、それまでの自身の歴史認識を関わらせて語っている。比嘉は、「植民地における住民の生活がいかに堪えがたいものであるか、実際に体験している者以外には、おそらく理解できないかもしれない。その堪えがたい苦難から脱して日本のもとに復帰することが、そして、三百六十年にわたる忍従と屈辱の歴史に終止符を打つことが、すべての沖縄島民の悲願なのである」<sup>103)</sup>と記している。しかしこの悲願が現実には沖縄の主体と乖離して進行し、沖縄に忍従と屈辱の歴史を強要した「祖国」へ復帰する意味は何か。比嘉は続けて、「沖縄の人々が祖国復帰を言う時、軍事的植民地からの遺習である経済的植民地の性格を払拭し、ほんとうの意味での祖国への帰属を望んでいる。(中略)祖国復帰運動は、人間解放、人間回復をめざしていた。復帰は伊波先生のことばを借りれば一種の奴隷解放ということができるともかもしれない」と記している。比嘉が願った人間解放ないし人間回復の道は、その背後に歴史の重みが存在する。しかしその道は現在もお厳しいものがある。

道が厳しいからこそ、インフォーマントとしての比嘉を見直す必要が出てくる。沖縄の復帰が現実の問題となり始めた1970年代初めに、新聞記者が比嘉に沖縄人の特性を一言で表現すると、どのように表現できるかと質問した。比嘉は「愚直！」と即座に答えたようである<sup>104)</sup>。比嘉の人生こそ、人間解放ないし人間回復をめざした愚直な人生そのものであった。人間解放や人間回復をめざす道は半ばであるものの、比嘉がとらえた沖縄の状況は変わったのであろうか。

1959(昭和34)年に30数年ぶりに帰郷した比嘉が、帰京後に書いた礼状のなかで、沖縄行きの感想を書いている。比嘉は、

島尻・中頭・国頭と、戦争によってはなはだしく変貌した都市や村落を見まして、十数年前郷里の皆さまの上に襲いかかり、幾万の尊い生命と幾世紀にわたって築きあげた生活を、一朝にして廃墟に帰せしめたあの戦争の恐ろしさとその罪悪の深きを、今更のように痛感いたしました。現在の世界情勢の中に郷里沖縄のおかれた困難な立場を考え、人類社会から是非とも戦争なるものを絶滅しなければならぬと、心にちかいました。目下建設中の辺野古の軍用地、返還されてそのままの西原村の飛行場も見ました。滞在中に起こった石川市のジェット機墜落事件には、特に大きなショックを受けました。けれども、それら米軍基地に関連する幾多問題の解決に、今日のわが沖縄人が自分らの運命を自らの手によって切り開いて行く盛んな意気を示しているのを見てまことに心強く、沖縄の将来について大きな光明を見、大きな希望を持つことができました<sup>105)</sup>。

と記している。これは約50年前の沖縄の姿を語っているが、沖縄をとり巻く現在の状況とは

とんど変わっていない。ただ変わったのは、比嘉のいう光明や希望がみえないということであろう。

## 注

- 1) 比嘉の本名は「春朝」であるが、他人から「源為朝の系統か」と聞かれるのがしゃくで、「さんずい」を付けて、雅号を本名のように使ったといわれている。比嘉の反骨精神が、そのようにさせていた。由井晶子「比嘉春潮を語る（続）—同伴者の衿持を貫いた気骨」（『新沖縄文学』、第34号、1977年、120ページ）。
- 2) 拙稿「伊波普猷と「沖縄学」の形成—個性と同化をめぐる—」（『京都産業大学論集人文科学系列』、第42号、2010年、1～34ページ）。
- 3) 比嘉春潮「『南島談話』『島』のこと」（比嘉春潮『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、366～7ページ）。以下では『比嘉春潮全集』は『全集』と略す。出版社名も略す。
- 4) 永積康安明・外間守善・（司会）大江健三郎「《座談会》沖縄学の今日的課題」（『文学』、第40巻4号、1972年、381～5ページ）。
- 5) 比嘉春潮「年月とともに」（『全集』第4巻、1971年、187ページ）；比嘉春潮『比嘉春潮「沖縄の歳月 自伝的回想』、日本図書センター、1997年、11～2ページ）。
- 6) 比嘉春潮「年月とともに」（『全集』第4巻、1971年、224ページ）；比嘉春潮、前掲書、1997年、50ページ）。
- 7) 比嘉春潮「年月とともに」（『全集』第4巻、1971年、198ページ）；比嘉春潮、前掲書、1997年、24ページ）。
- 8) 井上清「沖縄差別とは何か」（全国解放教育研究会編『沖縄の解放と教育』、明治図書出版、1976年、8～24ページ）；岡本恵徳「沖縄の歴史と差別」（全国解放教育研究会編、同書、38～51ページ）。
- 9) この身分制は、冊封・朝貢とも関係して歴史的に組み立てられてきたものである。上里隆史『海の王国・琉球—「海域アジア」屈指の交易国家の実像』、洋泉社、2012年、70～84ページ）。
- 10) 鹿野政直『歴史のなかの個性たち』、有斐閣、1989年、92～4ページ）。
- 11) 比嘉春潮「年月とともに」（『全集』第4巻、1971年、209～11ページ）。
- 12) シュワルツの日本との関わりについては、H.B.シュワルツ著／島津久大・長岡祥三訳『薩摩国滞在記—宣教師の見た明治の日本』、新人物往来社、1984年）。
- 13) 比嘉春潮「年月とともに」（『全集』第4巻、1971年、211ページ）；比嘉春潮、前掲書、1997年、34ページ）。
- 14) 南島におけるキリスト教の展開については、安齋伸『南島におけるキリスト教の受容』、第一書房、1984年）。
- 15) 三木健「研究者訪問 沖縄の歴史と比嘉春潮翁」（『南島史学』、第4号、1974年、56～7ページ）。
- 16) 当時、トルストイに影響を受けた青年は多い。拙著『報徳思想と近代京都』、昭和堂、2010年、147ページ）。
- 17) 清水俊行「レフ・トルストイとロシア正教会—探求と離反の運命をめぐる予備的考察（前篇）」（『神戸外大論叢』、第58巻3号、2007年、15～35ページ）；同著「レフ・トルストイとロシア正教会—探求と離反の運命をめぐる予備的考察（中篇）」（『神戸外大論叢』、第59巻2号、2008年、95～121ページ）；同著「レフ・トルストイとロシア正教会—トルストイとオプチナ修道院（後篇）」（『神戸外大論叢』、第60巻1号、2009年、33～64ページ）。
- 18) 比嘉春潮「年月とともに」（『全集』第4巻、1971年、227ページ）。
- 19) 由井晶子「比嘉春潮を語る—同伴者の衿持を貫いた気骨」（『新沖縄文学』、第33号、1976年、50ページ）。
- 20) 比嘉春潮「ふるい時代の思い出」（『全集』第4巻、1971年、182ページ）。
- 21) 比嘉春潮「年月とともに」（『全集』第4巻、1971年、217ページ）。

- 22) 拙稿, 前掲論文, 『京都産業大学論集人文科学系列』, 第42号, 2010年, 1~34ページ。
- 23) 比嘉春潮「屈辱の歴史からの脱却」(『全集』第2巻, 1971年, 272ページ)。
- 24) 比屋根昭夫「沖縄研究における歴史認識—「比嘉春潮全集」にふれて」(『文学』, 第40巻4号, 1972年, 546~54ページ)。
- 25) 比嘉春潮「柳田国男と沖縄」(『全集』第4巻, 1971年, 9ページ)。
- 26) 伊波普猷「琉球史の趨勢」(伊波普猷『伊波普猷全集』第7巻, 平凡社, 1975年, 10ページ)。
- 27) 伊波普猷「古琉球」(伊波普猷『伊波普猷全集』第1巻, 平凡社, 1974年, 62ページ); 伊波普猷「琉球史の趨勢」(伊波普猷『伊波普猷全集』第7巻, 平凡社, 1975年, 11~2ページ)。
- 28) 比嘉春潮「太平洋の日録 第四冊—吾が半面」(『全集』第5巻, 1973年, 295ページ)。
- 29) 比嘉春潮「自伝的回想より」(『全集』第4巻, 179~80ページ)。
- 30) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 230ページ)。
- 31) 武田時昌「加藤弘之の進化学事始」(阪上孝編『変異するダーウィニズム—進化論と社会』, 京都大学学術出版会, 2003年, 265~317ページ); 拙稿「中沢毅一の生物学と人間社会—天道・人道のアナロジー」(『報徳学』, 第8号, 2011年, 21~40ページ)。
- 32) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 239ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 67ページ。
- 33) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 255ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 86~7ページ。
- 34) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 252ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 83ページ。
- 35) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 260ページ)。
- 36) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 265ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 99ページ。
- 37) 比嘉は改造社の社員の中では年長ということもあって, 編集者がてこずる執筆者を割り当てられたようである。たとえば, 谷崎潤一郎, 福田徳三, 倉田百三 (以下は倉田), 阿部次郎らであった。最初は倉田を担当したようである。
- 38) 主食としての米や雑穀はもちろん, 甘藷までも手に入らないので, 野生のソテツの実や, 幹をくだいた粉などを食べるような生活の苦しさを, 象徴的にとらえて表現した用語である。沖縄の歴史では, 繰り返し現われた現象であるが, 多くは大正末期から昭和初期にかけての経済の疲弊期に使われる。沖縄県編『沖縄県史 別巻』, 沖縄県, 1977年, 337~8ページ。
- 39) 『沖縄協会報』, 創刊号, 1922年。
- 40) 沖縄県編, 前掲書, 沖縄県, 1977年, 99~100ページ。
- 41) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 285ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 121ページ。
- 42) 差別意識は自警団という民間人を殺人者に変えてしまったようである。仲村清司『本音の沖縄問題』, 講談社現代新書, 2012年, 103~7ページ。
- 43) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 285ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 121ページ。
- 44) 安倍は終戦時の鈴木貫太郎内閣の内務大臣となる。終戦後, 公職追放となるが, その後, 自民党の代議士となっている。
- 45) 1929(昭和4)年に社会主義の研究や逮捕者の救出を目的に結成された「日曜会」も, 比嘉の自宅に集まって開かれていた。
- 46) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 301ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 139ページ。
- 47) 比屋根昭夫「近現代沖縄における比嘉春潮の思想的軌跡」(『ふるさとを愛した篤学・反骨の研究者 比嘉春潮顕彰事業報告集』, 比嘉春潮顕彰碑建立期成会, 2006年, 56ページ)。
- 48) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 301ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年,

140 ページ。

- 49) 1926 (大正 15) 年 3 月に那覇市で結成された全日本無産青年同盟の地方組織である。1925 (大正 14) 年に日本共産党が青年組織をつくることを提唱し、東京をはじめとして各地で無産青年同盟が結成された。しかし 1928 (昭和 3) 年の共産党員の全国的な検挙と結社の禁止 (三・一五事件) によって、沖縄青年同盟は解散する。
- 50) 比嘉春潮・霜多正次・新里恵二『沖縄』, 岩波新書, 1963 年, 14~21 ページ。
- 51) 抗議文の原案は、新聞記者の東恩納寛敷が執筆し、松本三益、山田有幹、渡久地政馮らが検討を加えた。
- 52) 比嘉春潮・霜多正次・新里恵二, 前掲書, 1963 年, 20 ページ。
- 53) 比嘉春潮「柳田先生と私」(『全集』第 4 巻, 61~2 ページ)。
- 54) 柳田の南島旅行の状況については、柳田国男著・酒井卯作編『南島旅行見聞記』, 森話社, 2009 年; 酒井卯作『柳田国男と琉球—『海南小記』をよむ』, 森話社, 2010 年。
- 55) 柳田国男「故郷七十年 (改訂版)」(柳田国男『定本柳田国男集』別巻第 3, 1971 年, 334 ページ)。
- 56) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 358~9 ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997 年, 177~9 ページ。沖縄の民俗研究史については、宮良高弘・山下欣一「沖縄の民俗研究史」(瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス [増補版] 日本民俗学の成立と展開』, ぺりかん社, 1994 年, 419~63 ページ)。
- 57) 拙稿「笹森儀助と地域振興—『南島探験』をめぐって」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第 38 号, 2008 年, 116~46 ページ); 拙稿「沖縄の地方制度と報徳思想—『一木書記官取調書』をめぐって」(『報徳学』, 第 9 号, 2012 年, 105~24 ページ)。
- 58) 屋嘉比呷「古日本の鏡としての琉球」(『南島文化』, 第 21 号, 1999 年, 45~173 ページ)。
- 59) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 363 ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997 年, 182 ページ。
- 60) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 365 ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997 年, 184 ページ。
- 61) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 366~7 ページ)。
- 62) 拙稿「柳田国男の農政学の展開—産業組合と報徳社をめぐって」(『京都産業大学論集社会科学系列』, 第 27 号, 2010 年, 110~4 ページ)。
- 63) 比嘉春潮「インタビュー 明治老人の魂魂—沖縄は長男, 台湾は次男, 朝鮮は三男」(『全集』第 5 巻, 1973 年, 605~6 ページ)。
- 64) 比嘉春潮「柳田先生と沖縄」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 62 ページ)。
- 65) 柳田国男「郷土生活の研究法」(柳田国男『定本柳田国男集』第 25 巻, 1970 年, 314~28 ページ)。
- 66) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 345~62 ページ)。
- 67) 比嘉春潮「柳田国男と沖縄」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 9 ページ)。
- 68) 柳田国男, 前掲書, 1971 年, 320 ページ。
- 69) 由井晶子, 前掲論文, 1977 年, 121 ページ。
- 70) 比嘉春潮「柳田国男と沖縄」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 40~2 ページ)。
- 71) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第 4 巻, 1971 年, 366 ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997 年, 186 ページ。
- 72) 比嘉春潮「翁長旧事談」(『全集』第 3 巻, 1971 年, 176~208 ページ)。
- 73) 比屋根照夫「沖縄研究における歴史認識—『比嘉春潮全集』にふれて」(『文学』, 第 40 巻 4 号, 1972 年, 177 ページ); 比嘉政夫「比嘉春潮—その研究と方法」(瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス [増補版]』, ぺりかん社, 1994 年, 160~3 ページ)。
- 74) 拙著『近代日本の農業政策論—地域の自立を唱えた先人たち』, 昭和堂, 2012 年, 101~2 ページ。
- 75) 英米の民俗学の形成は、日本に比べてかなり早い。イギリスでイギリス民俗学会 (English Folklore Society) が設立されたのは 1878 (明治 11) 年, アメリカでアメリカ民俗学会 (American Folklore Society) が誕生したのは、その 10 年後の 1888 (明治 21) 年であった。いずれも国民国家の形成期

- と重なっている。日本の民俗学は英米の民俗学にくらべて、かなり遅れて誕生したことになる。柳田が『民間伝承論』のなかで記した「一国一言語一民族」とは、国民国家によって創出されたネイションとしての民族のことである。伊藤幹治『柳田国男と梅棹忠夫—自前の学問を求めて』、岩波書店、2011年、153～4ページ。
- 76) 久米仙「わが郷里の人々 (1)」(『南島』, 1933年11月17日)。
  - 77) 柳田国男, 前掲書, 1971年, 416～8ページ。
  - 78) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 371ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 192ページ。
  - 79) 金城朝永「最近の沖縄研究の動向と情勢—琉球研究史の一節」(『金城朝永全集 (下巻)』, 沖縄タイムス社, 1974年, 425ページ)。
  - 80) 納富香織「比嘉春潮論への覚書—1930～1940年代の在本土沖縄県人との関係を中心に (付 比嘉春潮著作目録)」(『史料編集室紀要』, 第32号, 2007年, 29～30ページ)。
  - 81) 「読み難い姓名改姓座談会 大阪南島文化協会主催」(『琉球新報』, 昭和12年4月14～15日付)。
  - 82) 比嘉春潮「親泊康永君のこと」(『琉球新報』, 昭和4年8月1日付); 比嘉春潮「沖縄を考える人びとに—「沖縄の自由民権運動」を推薦する」(『全集』第4巻, 1971年, 109～111ページ)。親泊には『義人謝花昇伝—沖縄自由民権運動の記録』(新興社, 1935年)という著書があるが、これが謝花昇像をつくることによって、この人物を著名にした。拙稿「謝花昇の農業思想—沖縄と近代農学の出会い」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第35号, 2006年, 25～54ページ)。
  - 83) 太田の思想的脈絡については、拙稿「太田朝敷の地域発展論—沖縄の「独立自尊」をめぐる」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第40号, 2009年, 135～74ページ)。
  - 84) 「上京諸名士と在京有志との交歓」(『大阪球陽新報』, 昭和15年6月1日付)。
  - 85) 比嘉春潮・霜多正次・新里恵二, 前掲書, 1963年, 27～30ページ; 外間守善『沖縄の言葉と歴史』, 中公文庫, 2000年, 366～70ページ; 納富香織, 前掲論文, 2007年, 37～9ページ。
  - 86) 伊波普猷「小緑の目白」(伊波普猷『伊波普猷全集』第10巻, 平凡社, 1976年, 175～9ページ); 伊波普猷「適正な奨励法を一伊波さんは語る」(伊波普猷『伊波普猷全集』第10巻, 平凡社, 1976年, 430ページ); 伊波普猷「方言は無暗に弾圧すべからず—自然に消滅させ」(伊波普猷『伊波普猷全集』第10巻, 平凡社, 1976年, 431～2ページ); 伊波普猷「方言と国語政策—国語の南島への宏通」(伊波普猷『伊波普猷全集』第8巻, 平凡社, 1975年, 623～6ページ)。
  - 87) 方言に関する伊波と比嘉の見解は類似点のみではなく、異なる点もあった。仲嶺政光「「方言講演」考—近代沖縄・伊波普猷と比嘉春潮と地域文化」(『教育学年報』, 第6号, 1997年, 521～45ページ)。
  - 88) 対談 柳田国男・柳宗悦「民芸と民俗学の問題」(『月刊民芸』, 昭和15年4月号)。
  - 89) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 395ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 216ページ。
  - 90) 比嘉が編集発行にあたってきた『沖縄文化』誌は1950(昭和25)年4月の第16号から名称を変更して『文化沖縄』誌となっている。そして1953(昭和28)年2月の第27号が最後となる。会報が発行されていた期間は約4年余りであった。
  - 91) 比嘉春潮「沖縄の農民生活」(『全集』第2巻, 1971年, 84～118ページ)。
  - 92) 比嘉春潮「薩摩統治下の沖縄農民」(『全集』第2巻, 1971年, 295～9ページ)。
  - 93) 比嘉春潮「日本復帰署名運動は有害 各界指導者層の意見」(太田直治編『沖縄タイムス』, 第2号, 1948年1月21日付)。
  - 94) 比嘉春潮「全集の刊行にあたって」(『全集』第1巻, 1971年, 3ページ)。
  - 95) 由井晶子, 前掲論文, 1977年, 116ページ。
  - 96) マックス・ウェーバー著/尾高邦雄訳『職業としての学問』, 岩波文庫, 1936年。
  - 97) 柳田国男「海上の道」(柳田国男『定本柳田国男集』第1巻, 1968年, 3～34ページ)。
  - 98) 比嘉春潮「柳田国男と沖縄」(『全集』第4巻, 1971年, 3ページ)。
  - 99) 三木健, 前掲論文, 1974年, 55ページ。
  - 100) 比嘉春潮「屈辱の歴史からの脱却」(『全集』第2巻, 1971年, 272ページ)。

- 101) 鹿野政直, 前掲書, 1989年, 105~9ページ。
- 102) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 406ページ)。
- 103) 比嘉春潮「屈辱の歴史からの脱却」(『全集』第2巻, 1971年, 274ページ)。
- 104) 由井晶子, 前掲論文, 1977年, 116ページ。
- 105) 比嘉春潮「年月とともに」(『全集』第4巻, 1971年, 405ページ); 比嘉春潮, 前掲書, 1997年, 224ページ。

## Shuncho Higa and Development of Okinawan Studies

Nobuhisa NAMIMATSU

### Abstract

Shuncho Higa (1883-1977) was a representative researcher in the field of modern Okinawan history. He is known as a proponent of Esperanto as well as a socialist activist. He was a graduate of Okinawa Normal School and worked as an elementary school teacher, rising to principal before resigning as a result of his opposition to the contents of Japanese education, which treated Okinawans as "backward". He then worked as a newspaper reporter and as a government official in the prefectural office. He became interested in Okinawan history after meeting Fuyu Iha (1876 - 1947) in 1910, and began working for a publishing company in Tokyo in 1923. There, he studied under the celebrated folklorist Kunio Yanagida (1875-1962) and studied Okinawan folklore while continuing to be involved with socialist activities.

Higa developed his studies on Okinawa, not only through the methods of folklore, but also using the viewpoint of social and economic history. He described himself as an "informant" about Okinawan history, meaning that he introduced Okinawa as it was, from the inside. However, he was not just a simple informant, because he left many fruits of his research. His many studies on Okinawa were published after the war. Until recently, there has been little research about him as a scholar, although his interaction with Iha and Yanagida was well-known.

In this paper, Higa's life is divided into five periods: (1) His youth, when he was devoted to Christianity and Tolstoyism, (2) His subsequent interest in Okinawan history after meeting Iha, (3) His period of socialist activism, (4) His time spent studying Okinawan history from a folkloric angle under Yanagida, (5) His postwar period during which he published many writings. Through these periods, the author shows that Higa played an important role in Okinawan studies, studying Okinawan history through "objective" information and documents of Okinawa. He was a researcher who expressed the uniqueness of Okinawa as an informant.

**Keywords:** Shuncho Higa, Okinawan studies, Informant, Fuyu Iha, Kunio Yanagida